

# 日ソ米の激突線

特251

888

- ◇ 世界を赤化に導く米の参戦
- ◇ 共榮圏の建設は史的聖業
- ◇ ソ聯關係を調整して南へ進め

國際日本協會發行

# 始





南洋の歴史と  
米の集散線



山川

壽編

(最新刊)

# 印度支那 重要歴史年表

菊 判

四十六頁

定價金五拾錢

## ★ 南洋研究の指南車！

近來東亞弱小民族の解放、東亞經濟ブロッカ論等が頻りに喧傳せられ、東亞の寶庫南洋研究熱が昂まりつゝある。しかし乍ら眞の南洋研究は、單なる現象形態の追及のみを以つてしてはなし得られない。南洋諸民族の傳統を構成する歴史研究なくしては眞の南洋の姿は把握し得ないからである。此の意味において本書の如きものゝ出現は實にアップ・トゥ・デートのものと言ふべく、また新しき南洋研究の指南車たる役割を演ずるものと言ふべきであらう。まして本書が著者の若い情熱を傾け盡して苦汗の中から生み出されたに於いてや。

## ★ 東亞經濟建設への好參考資料！

東京市麹町區幸町東拓ビ内

國際日本協會

振替東京二四二〇番

## 内 容 目 次

一、三國同盟と日本の進路……………	一
二、共榮圏の建設は史的聖業……………	三
三、歐洲戦局の推移……………	六
四、アメリカ最近の動向……………	一〇
五、大統領の議會教書……………	一三
六、米國の國防豫算……………	一七
七、米國と東亞及び太平洋……………	二二
八、對日・英米協力の擴大……………	二六
九、日支事變の現段階……………	三二
十、注目すべきソ聯の態度……………	三六
十一、日ソ關係調整の問題……………	四一
十二、ソ聯の國是とその外交方針……………	四五
十三、ソ聯の經濟並びに産業……………	五一
十四、ソ聯國防の實勢……………	五七
十五、ソ聯の強味と弱味……………	六一
十六、日ソ接近の必要性和可能性……………	六四
十七、日ソ國交調整の難關……………	七一
十八、ソ聯に對する日本の要求……………	七六
十九、われ等の根本的覺悟……………	八〇

## 米國のため惜しむ

支那事變第五年、今や、われ等はより大なる勁敵に遭遇して、危急存亡の岐路に立たされつゝある。

イギリスとアメリカとは、つとに前大戰直後より、一途に日本制壓を以て、その極東政策の基本目的としてゐたが、滿洲事變に次ぐ今次事變の一度び起るや、極力、陰に陽に蔣政權を支援して、日本打倒に努めて來た。すでに五年にわたる事變の長期化は、その抑もくゝ發生とともに、このイギリス及びアメリカの支援に——並びにソ聯のそれに——基づくこと深大なるものである。然れども、わが日本は周知の如く、この腹黒いイギリス及びアメリカの態度に深く憤りを感じつつも、事變の紛糾と戰亂の擴大とを避けんがため、終始忍耐してきた。日本が、いかに戰爭を欲するものでないかは、事變發生以來の経過について見れば判る。獨伊との同盟も、戰亂を擴大せんがためのもものではなくして、むしろ速かにこれを制止收拾し、平和回復を企圖せんがためであることは、わ

が政府の既に再三聲明して居るところである。

然るに、今やイギリス及びアメリカは、歐洲において、あくまで獨伊に對して、その宣言及び不宣言戰爭をつゞけ、これが覆滅を期するとともに、東亞においては、對日經濟封壓を益々強化する一方、新たに對支援助を公然増大し、かつその南方諸領土に戰備をすゝめて、明らかに日本に對して、一の挑戰を以つて臨んで來てゐる。殊にアメリカ最近の態度は、驕慢むしろ奇怪を極めたものであつて、それ自身は、なほ公然參戰するに至らず、また戰意なきが如く強調するとは云へ、歐洲に於ては、イギリス防衛を以つて、「アメリカ國防の第一線」と見做すに決し、東亞においては、南方諸國乃至諸領土及び支那の地域までに及ぼして、その「國防の第一線」の強化擴大を圖りつつ、殆んど東西兩洋の果てに至るまで、自國の支配圏として、これがために必要な軍備を始めとして、凡ゆる非常方策を強行し、露骨なる胸脅的言辭までも敢えてするに至つた。これらの問題については、その原因とともに、本書の本文に詳述するところであるが、このアメリカの態度——ことにハル國務長官の今期議會における演説の如きは、わが日本に對して、また獨伊に對して、「不宣言戰爭」以外の何んであらうか！

アメリカは明かに「不宣言戦争」を事として來てゐる。アメリカはこれを公然と宣言せられたる戦争にまで發展せしむるかどうか、果してその決意乃至覺悟を有するか、否かを、筆者はなほ詳知しない。が、いづれにしても、筆者はこのアメリカの態度をアメリカ自身の爲に惜しむものである。彼れがこの擧に出でつつある所以は、何よりも先づその世界に誇る資本主義の盛榮を維持せんが爲であることは云ふまでもない。かれ等が日頃高唱し、そのために戦ふと稱するところの「デモクラシー」とか、「自由」とかは、その本來は人類の深き理想的要求に發したものであり、わが建國の大理想たる「八紘一宇」及び「萬民翼賛」の理念にも通ずるものであつたが、少くとも、今日においては、アメリカは不當なる世界の現状を自益的に維持し、一にも、二にも、資本主義の隆昌を護らんための獨裁政治を行はんとしつつある。また、かれ等は諸種の美名において、諸多の弱少國家乃至民族の犠牲において、自らの繁榮をのみ増大せしめんとしてゐる。併しながら、究極において、この血迷ふアメリカの運命は、自國をして、かれ等の期待とは、逆に謂はゆる「赤化」へ導入するのみならず、自らの資本主義體制をも崩壊せしめて、遂には全世界の文化をも廢墟たらしむる誘因となるであらう。

蓋し、アメリカが参戦する時においては、まづ、この戦争は全世界を通じて、その支配者とこれを打倒せんとする者、謂はゆる「持てる者」と「持たざる者」との戦ひたることを、愈よ最終的にハッキリせしむるであらう。そしてこの戦争は必然的に世界的解放戦の形態に轉ずるであらう。初めは、かかる表現を種々の事情で避けてゐた國々——例へば、日本の如きも、戦争の長期化するにつれて、對外的及び國內的必要に迫られ、漸次その國內體制を整備しつつ、必然的に斯かる形態を採るに至るであらう。かくてアメリカは、その帝國主義政權とともに、全世界の前にその野望を摘發され、世界戦争の眞の挑發者として、その罪を問はれるに至るであらう。且つアメリカは、イギリスとともに、「デモクラシー」や「フリーダム」の欺瞞的ヴェールを以つてしては、到底、これを如何ともなし得ない運命に立ち至るであらう。

第二に、アメリカが参戦した場合に、自國內において、その資本主義の不平等、不正、非自由、非民衆性を如實に曝露して、これに對する民衆の自覺に伴ふ闘争を激成するに至るであらう。アメリカには今約一千萬の失業者群があるが、假りに、その全部が戦争に因る軍需産業の擴大の結果、職場に吸収され得たとしても、それだけでは問題は

解決されるものでない。もし、戦争に當つて、その失業者を救済しうるといふが如き單純の理由にて、國內安全が期せられるならば、前大戰の當時、ロシアを始めとする數多の國々における内部崩壊及び革命などは起らなかつたであらう。然るに、戦争は凡ての期待を裏切り、必然的に、國民殊に無産階級の困苦、犠牲を増大せしめていつた。そしてその國における餘りにも隔絶せる不平等、貧富の相違は、その國民の個々をしてその根源に對する自覺及び反撥を促がさずには置かなかつたのである。アメリカは、種々の點において、今日、かかる傾向に陥る可能性乃至危険性の最も多い國であり、前大戰におけるロシアとその點において、酷似する社會様相を多分に有つてゐる國である。

いづれにしても、アメリカは、その參戰する時においては、帝政ロシアの二の舞ひを踏むに至ることは必至であり、資本主義の盛榮を維持せんとして、却つて内部崩壊によつて、その墓穴を掘るに至るであらう。假りに、戦争がアメリカの有利に終つたとしても、アメリカは今日以上に何物をも獲るところが無いであらう。それは前大戰に參戰せることに依つて、經驗済みとなつてゐる筈である。現に既にイギリスは、戦争を繼續することによつて、漸次、その内部體制は社會主義化しつつある。そしてこの傾向は、戦

争が終結するに至つても、最早や元に還らざるものとされてゐる。アメリカもまた一度び參戰する時は、この傾向から免れうるものではないことは、歴史の訓ゆるところである。繰返して云ふ、アメリカは、飽くまで資本主義の盛榮を維持せんがため、戦争に參加せば、結局、獲るところのものは、その最も忌み避けむとする自らの「赤化」以外の何ものでもないのである。これ、即ち、筆者がアメリカの爲に惜しむ所以である。

それにも拘らず、アメリカは、一路、戦争への途に盲進して、事實、今や、その第二線において戦つてゐる。これがために、イギリスとの間に、とくに、イギリス本土が、ドイツによつて占據せられた場合に備へて、全イギリス自治領を包括する一の兩國合邦案乃至兩國共同防衛案が、明らかに決定されて居ると思はれるものがある。この計畫にして、實現される時は、東亞においては、濠洲、ニュージールランド、フィリッピン、蘭印、マレイ、印度に互つて、一大アングロサクソン領國が出現するわけである。自然、日本は完全にその南方生存圏を封鎖されて、三方敵の重圍に陥る。而かも、イギリス及びアメリカは着々その方針を進め、既にフィリッピン、蘭印、マレイ、重慶を結ぶ線を以つて、對日第一線となし、今や、公然とこれが防壁の築造に狂奔して居るのである。

この時に方つて、わが日本が如何になすべきかは、自ら明白でなければならぬ。敵は、既にその反省するなき牢固たる決意と、無謀なる計畫とを進めて、わが日本の咽喉を扼しつつあるのだ。われ等は斷乎として目標の地域——南方に進み、これを確保する有るのみである。かくして漸く五ヶ年にわたる支那事變をして、眞に「聖戰」たらしめ、これを終結に導くものであるとともに、われ等の近親民族たる南方諸民族を、その久しき搾取と壓制より解放して、「アジア人のアジア」を建設する唯一絶對の鍵はこゝにあるのである。また、かくして、始めて獨伊が西に企圖する「歐洲新秩序」と並立して、東における「東亞新秩序」が完遂し得られるものと信ずる。

この大業を現實化する爲には、先決的國策として、北における、ソ聯邦との間に、可及的速かに國交を調整する必要がある。勿論、ソ聯邦は、わが國とは、相容れないマルクス主義を奉ずる國柄である以上、將來共に油断は出来ない。が、わが日本は、いま西に、南に、東に敵を受けつつある時に、強ひてこれと争はねばならぬ理由はない。またソ聯邦にあつても、後章に立ち入つて説明せる如く、今俄かに日本と争はねばならぬ顯著なる事實はない。かつ日獨伊同盟の嚴乎として存在する以上、實際、それは不可能で

もある。ゆゑにわが日本は、この際、大局的大外交方針に基いて、北、ソ聯邦との間に國交を調整し、迷ふところなく、南方へ驀進して運命の打開に従事すべきである。

既に昨二六〇〇年——一九四〇年において、わが運命は決定されたと言つてよい。進むも斷崖、退くも斷崖である。われ等は一大覺悟を要する秋に直面した。狐疑逡巡、つひに前大戦におけるドイツの如く終はるか。それとも國運を賭して敢然と進み、今や、アングロサクソン聯邦の手中に掌握せんとする、われ等の南方生存圏を未然に確保し、以て死地に生を得て、輝かしき將來を保障するか、二者その一途を擇ぶのみとなつた。

本書は、如上の重大問題に對する考察及び認識に必要な若干の基礎的知識乃至緊迫せる國際事情について述べた。現在、日本が國際的に如何なる地位にあるか、相手の國々は如何なる状態及び準備をもつかを述べ、そして同時に、また日本の進むべき途の示唆強調も怠らなかつたつもりである。もとより、その餘蘊なき解明は、かゝる小冊子の能くなしうる所ではないが、多少でも、讀者諸賢の時局認識に資し、國家方針の決定または輿論の喚起に役立つならば、筆者の大幸これに過ぐるものはない。

# 東西新秩序の進展と 日ソ米の激接線

内藤民治

## 一、三國同盟と日本の進路

昨年九月二十七日を以て結成調印された日獨伊三國同盟は、本質的意義において、世界史上、一新紀元を劃する重大なる事實である。この同盟は、從來の國際史上に見る如き、單なる便宜的攻守同盟や合従連衡の一形態ではなく、アングロサクソンの自由主義世界體制への反撥として、東西に爆發した革正の運動が、その歴史的必然性の故に流合し契盟したところの、世界的革新力の結成である。

支那事變も第二次歐戰も、表面的には偶然な日支の衝突乃至英獨の勢力抗爭の觀を呈し、事象の本質的解剖を得意とするコムメンテルンでさへ、最初は、單に列強間の帝國主義戰爭に過ぎないと看取してゐた。だが、最近では、少くとも歐戰については、英佛反動帝國主義者の對獨挑戰に外ならぬと見るに至つた。それほど、その内面的意義が明瞭化されて來た。この二つの戰爭は、いづれも、英米の舊世界秩序の壓迫を排除して、合理的な新世界秩序、新平和機構を打ち建てんとする世界的維新戰爭である。日本の闘争の目標は支那そのものではなく、獨伊の闘争目標も英佛そのものではない。眞に目標とするところは、英米佛等を據點とする國際的金權支配の廢絶であり、國際的搾取機構の斷除である。

この故に、日獨伊三國同盟は、恣意的選擇による便宜的提携ではなく、共通の歴史的使命による同志間の血盟であり、不可避的運命による自然の結合である。同時に、それはまた、當面の利害を超越した新らしき世界觀の上に立ち、一層合理的な新世界秩序を展開せんとするものである。こゝに新らしき世界觀とは、謂ゆる共存共榮主義であり、人類を一貫する相互扶助の大道であつて、弱肉強食の英米主義とは根本的にその質を異にするものである。

かくして、三國同盟條約は、その冒頭において、「萬邦をして各其の所を得しむるを以て、恒久平和の先決條件なりと認めたるにより、大東亞及び歐洲の地域に於て、各其の地域に於ける當該民族の共存共榮の

實を擧ぐるに足るべき新秩序を建設し、かつ之を維持せんことを根本義と爲し……相互に提携し且協力することに決意せり」と、實に堂々たる宣言をしてゐる。しかも三國の提携は、その本旨において、何等排他的性格を有せず、「世界到る所に於て、同様の努力を爲さんとする諸國に對し、協力を吝まざるものにして、斯くして、世界平和に對する三國終局の抱負を實現せんことを欲す」と聲明し、以て新世界體制が數個の大地的共榮圏の複合體たるべきことを示唆すると共に、ソ聯や米國をも含む世界の各指導的民族に對し、同様の協力的努力への轉換を待望してゐる。

故に、三國同盟條約は、世界革新の一大宣言であり、基本綱領の宣布であると同時に、これに對する全世界の協力への要請でもある。この意味において、東西における同盟側の戦ひは、世界の合理的再編制を目指す聖戰であり、これを阻止せんとする一切の闘争は、人類の必然的發展に逆らはんとする憐むべき反動にすぎない。そして單なる反動は、如何に花々しき様相を示さうとも、終局においては、没落の悲運を免れないのである。

## 二、共榮圏の建設は史的聖業

第一次近衛内閣當時より、公然と主唱されるに至つた東亞新秩序、東亞ブロック、東亞民族協同體等々の用語も、世界政局の進展と共に、現近衛内閣に至つて、大東亞共榮圈といふ新たなる標語に轉化し、その圈内には、たゞに日滿支三國のみならず、更に佛印、蘭印、泰、比律賓等々、南洋一帯の地をも包含せしむるに至つた。謂ゆる共榮圈なるものが、一面において、大地域の自足經濟を根本條件として要請する限り、東亞共榮圈は、必然的に南太平洋を包攝せざるを得ないのである。もちろん、大東亞共榮圈といふ名稱は、極めて彈力に富む發展性を有するもので、情勢の變化に應じて、その内容も自然擴充されるものである。蓋しそれは、わが肇國の理想たる八紘一字の大精神に基く共榮地域の建設を主眼とするものであり、帝國主義的領土分割に見るが如き、規條的制限を豫定するものではない。すなはち、本來それは、多々ますます攝取不捨的に進展する包容的性格のものである。

さて、われわれが聖戰四年を通じて明瞭に把握し得たところのこの國際的概念は、三國同盟條約によつて世界的に確認され、従つて、これに對するわが指導權も確認されるに至つた。かくして、その歴史的意義は一層深化すると共に、とかく逡巡がちであつた日本の進路は、明確にその方向を規定された。今や、わが日本は、ひたすらこの方針の具體化に向つて、日本の形態と獨創的方式とを展開しつつ、果敢なる前進を續けるのほかない。

勿論、前途は極めて多事多患である。大東亞共榮圈の建設から、世界的な新秩序へと連なるわが歴史的聖業は、それ自身日本の興亡、否な、アジア民族の興亡に關する一大試練であり、必死の努力なくして達成し得らるべき尋常の事柄ではない。畏くも、三國同盟成立に際して漢發せられた御詔書には、

惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得セシメ、兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムルハ、曠古ノ大業ニシテ前途甚ダ遠遠ナリ、爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ、深ク謀リ遠ク慮リ、協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ。

と、適切にも御垂示遊ばされたのである。

しかるに、右同盟條約第三條における、日獨伊の政治、經濟、軍事上の互助規定については、日本の大局上甚だ不利ありとする英米の宣傳に、ともすれば、傾從せんとする淺見者流のなほ存する事實は、甚だ遺憾の極みである。既に日本の進路が、歴史的必然性によつて確平方向づけられた以上は、當面に降りかかる困難のために、滿洲事變前の状態にまで後退し、浮動的勢力均衡政策に還元し、以て再び彷徨遠遊を繰返さんとするが如きは、まさに亡國的態度といはなければならぬ。

日本の現に到達した段階は、われわれにとつて、維新以來の、また一般的には世界史的發展の、内面的にして且つ必然の過程であり、強いてこれを避けんとすれば、究極において、世界的落伍者たるの運命を

甘受せざるを得ない。われわれは、たゞその必然的進路を邁進することによつてのみ、果敢なる決意と、創造的發展とが期せられるのである。

今や、幾多の難關がわれ等の目前に重疊してゐる。だがこれ等の難關を突破する方法は、要するに、日本の高度國防國家體制の確立と、三國同盟の強化並にその活用と、さらに、もし可能ならば日ソ關係の調整との外にはないのである。三國同盟は、遊戯團體のチームではなくして、戰略的にも、政治的にも、經濟的にも、あらゆる角度から不斷の再強化、再組織、再活用之道は無限にありうる。またそれとの關聯において、日ソ國交調整の道も自ら打開さるべき筈である。以上要は、無意味な悲觀や、姑息な樂觀を排して、積極的に、新たな手段と方式とを不斷に講究し實踐することが肝要である。

### 三、歐洲戦局の推移

繰返し述べたやうに、日本の前途はますます多難であり、謂ゆる大東亞共榮圈の建設も素より前途遼遠である。が、如何なる意味において多難多難であり、前途遼遠であるかを明かにするには、昨今の國際情勢について、一應の検討を試むる必要がある。

まづ歐洲情勢の鳥瞰から始めやう。今夏以來、歐洲西部におけるドイツの電撃作戰によつて、北はデンマーク、ノルウエーから、降つてオランダ、ベルギー、フランスと瞬く間に席卷され、英國また大陸から敗退して、ひたすら本國籠城を餘儀なくされ、そのうへ、昨日の盟邦フランスは、今日既に獨の陣營に合體し、更にイタリーとの會戦を迎へるに至つて、英國の運命は、今や、全く落日の觀を呈するに至り、ことにドイツの猛空爆と、英本土襲撃作戰の脅威下において、戦々として明日の運命を氣づかひつゝあるのがその實狀である。

とはいへ、英國側は、米國の強力なる援護の下に、今なほ最後の勝利を豪語しつゝ、前途に一縷の希望をかけてゐるのである。

英國側は、ドイツ占領地帯における飢饉とか、その海上封鎖によるドイツの資材不足などを誇張的に宣傳し、長期戦ともなれば、かれの勝算歴々たるかの如く吹聴して、強いても自ら慰めんとしてゐる。けれども、今日では、獨伊側による對英逆封鎖こそ一層問題である。

ドイツはその空軍並に潜水艦戰術によつて、英國側の船舶擊沈に逐日莫大なる成功を收め、最近は英商船擊沈數一週約九萬噸にも達し、既に英船七、八百萬噸が海底の藻屑と化してゐる。いふまでもなく、その歐洲よりの通商路は殆んど潰滅に歸し、大西洋側の輸送路の困難も刻々加はつてゐる。そして、最近、

英國無任所相グリーンウッド氏は、この情勢を英國の危機として警告してゐるのである。他方、ロンドンを始め、各重要軍事都市に對するドイツ空軍の爆撃は、近來ますます熾烈を極め、それがための生産力破壊と、前述の通商路攪亂とが相俟つて、逐日、物資の缺乏を加へゆくことは當然であり、かくて嚴冬を迎へんとする英國民の困苦は、恐らくわれわれの想像を絶するものがあらう。

更に注意を要することは、一萬五千の英國共産黨の活躍である。獨ソ提携以來、各國ともに共産黨は、以前のファッショ攻撃を停め、鋒を専ら帝國主義と資本主義とに向け、英國における好戰的現支配階級を痛撃しつゝ、反戰論、和平論、人民政府の組織などを叫んで農勞階級を煽り、戰禍の増大と共に國內不安の氣流は漸次濃化しつゝあるのである。英國の文明批評家ウエルズ氏が、過般、渡米の際に、遠からず英國には革命が起るであらうと、不吉の豫言さへ試みてゐるのも、決して理據なき妄言ではなさうである。

戰爭が長引けば、英國の軍需品、特に空軍の生産力はドイツを凌駕することになり、ドイツの英本土襲撃の如きは一片の夢想に終ると、英當局は豪語してゐるが、一切の軍需生産機關が、ドイツ空軍の痛撃下に喘ぎつゝある今日、恐らくこの言を信する者は殆んどない筈であり、元來、立ち遅れた英國の軍備が、敗戦下において立ち直るなどいふことは、單に技術者養成の見地から考えても、斷じてあり得る筈はない。かくして英國の頼むところは、専ら米國からの援助であるが、それには一定の限度があり、前述の如き

輸送難もあつて、結局のところ、數ヶ月間の延命を期する以上のことは望み得ないであらう。

これに對して、ドイツ側は犠牲の比較的多い英本土襲撃については、適當のチャンスを狙つてゐるものの如く、恐らくこの冬期をは持ち越して、専ら英國生産機關の破壊と經濟的逆封鎖の徹底とに主力を注ぎ、同時に、英國の物質的、思想的内部攪亂に意を用ゐながら、他方、着々として歐洲新秩序の建設に邁進せんとする態勢にある。

特に注目すべきは、ドイツの謂ゆる外交進撃であるが、昨年十月頃よりかけて、獨伊樞軸外交の動きは目醒しい活氣を帯び、十一月十二日から三日間にかけての、ソ聯モロトフ首相とヒットラー總統との謂ゆるベルリン會談以來、獨ソ間の提携は一層強化され、その後、獨伊軍事會談、佛西會談、獨物會談、獨伊西會談、ハンガリーの三國同盟加入、次いで、ルーマニア、スロヴァキアの同盟参加、獨羅新經濟協定の成立、バーベン獨大使の對トルコ工作、ユーゴスラヴィアの樞軸接近等々、實に送迎に暇なきほどの進展ぶりを示した。また、ブルガリアの樞軸陣營参加も恐らく時間の問題にすぎず、かくてバルカンは、トルコ、ギリシャを除き、全く獨伊の傘下に安定せんとしてゐる。

この間、伊希間に新たな交戦を見るに至つたが、今のところ伊軍の戦績抄々しからずとはいへ、イタリアが中途にその目的を齟す筈はなく、やがてそのギリシャ制壓も、これまた時間の問題に過ぎないであら

う。しかしトルコの今後の向背は未だ逆睹し難いとはいへ、既にフランスが敗退し、英國の救援殆ど頼むに足らず、ソ聯また積極的にトルコを援護するの意なしとすれば、最後の歸趨は大方想像されるのである。

そこで、一番問題なのはソ聯の態度であり、これについては後段詳述するつもりであるが、要するに、差當りソ聯は獨伊側と正面衝突する意志は全然ないものと見てよい。かれとしては、むしろ獨伊側と提携しつつ、適當の機會において、イラン、アフガン方面への進出を企てることとなるかもしれない。

地中海を中心とする英伊の爭覇戦は、全體として不活潑を極め、目下の情勢では勝敗の數も不明であるが、これも英本國側の危機切迫や、豫想されるバルカン、近東へかけての獨伊協同作戰の進展と共に、結局は樞軸側の勝利に歸するであらうと信ずる。

#### 四、アメリカ最近の動向

以上は、大體、歐洲方面の形勢であつて、次に問題なのはアメリカ最近の動向である。

米國は、英國を以て大西洋におけるその防壁と考へてゐる。そこで英獨開戦の當初から、經濟的對英援助を行つて來たのであるが、フランスの敗戦に續く英國の危機切迫と共に、漸次その援英政策を強化する

に至つた。

勿論、英國にとつては、今では米國の援助乃至協力のみが頼みの綱であり、先きに、米國に幾多の海軍根據地を提供することによつて、驅逐艦五十隻の譲渡をうけ、かつ空軍機を始め、あらゆる武器、軍需資材の供給を仰ぎつゝある。そして、かゝる英米協力の關係は日一日と強化され、米加防衛協定の成立となり、英、米、濠の會談となり、その共同戦線は、大西、太平兩洋に互る廣汎なものとなし、今日では、英米兩國は事實上、攻守同盟國家の觀を呈するに至つた。

しかしながら、米國は偶々大統領選舉の問題を控へて、その對外政策も、やゝ不確實の感なきを得なかつたが、ルーズヴェルト現大統領の三選決定と共に、愈よその態度を明確化するに至つた。

大統領選舉戦酣なる昨年十月十二日、ルーズヴェルト氏はデイトンにおける演説の中で、

「歐洲及びアジアの獨裁諸國(かれは認識不足にも日本を獨裁國に含めてゐる)が如何なる結合を以てしやうとも、われわれの大道を阻むものでもなければ、また苦戦を續けつつある最後の自由なる國民(英國や抗日支那)に對し、その窮境を救ふべく、われわれが與へる援助を阻むものでもない。米國は軍備の擴充を續けると共に、米洲から遠く侵略に抗して戦ひつゝある國民に對し援助を續けるであらう。」と叫んでゐる。これを要するに、日獨伊三國を侵略者として挑戦すると共に、これ等と抗爭する英國及び

重慶政權に對し、徹底的援助を與へるといふ意味で、ル大統領の政策は、今や、米國自體の政策と化するに至つた。蓋し、ルーズヴェルト氏を大統領に三選した米國國民は、當然かれの政策に全面的O・Kのスタンプを捺したものと見られるからである。

尤も、ルーズヴェルト大統領は、會戰回避の意向を選擧民に約束してはゐるが、かれの制裁主義をますます具體化しゆく以上、會つてのウィルソン大統領の二の舞ひを演ずる危険性は、極めて濃厚であるといはねばならぬ。

かくて去る十一月八日、ルーズヴェルト大統領は、新聞記者團との會見に際し、米國大型重爆機、戦闘機、その他約五十%の飛行機を、英、加空軍に提供する旨を聲明し、また最近は、二十五億ドル對英借款供與說、米船舶の英國への大量讓渡說なども傳へられ、更に米國軍艦による對英軍需品護送問題、ジョンソン中立法の改廢問題なども考慮されつゝある模様で、いよいよ對英援助強化への一歩前進が明瞭化するに至つた。そしてこのまゝ進めば、好むと否なとに拘らず、結局、米國の參戰は避け難きものと見なければならぬ。

## 五、大統領の議會教書

米國の第七十七議會は、この一月三日開會され、恆例によりて、その劈頭において、大統領の「一般教書」が發表された。參戰か不參戰かの重大岐點に立つ米國の現状は、大統領自身の述べたる如く、「米國史上未曾有の重大時機」に直面してをり、山積する内外の重要法案が課せられたコンGRESSの動向に深く關心を抱くものは、單り米國民のみに止まらないのである。ルーズヴェルト政府の外交政策に對する議會の態度は、今のところ、全く「默從」の一語に盡くる實情である。ゆゑに、大統領の教書に盛られた諸政策並に直前の國家方針こそ、同國の進むべき方向を明示するものとして、われ／＼に決定的判斷を與へる絶好の資材とすべきものであらう。

こゝに一般教書の概要について述べるならば、同教書は、ル大統領自らによつて、約四十分互つて朗讀され、「今日の如く、深刻に米國の安全感が外部から脅かされた時代はない」との冒頭に始まり、「米國並びに民主主義の未來と安全とは、米國々境の遙か彼方の出來事にも絶對的に包含されてゐる」として、對英最大限援助の急務を高調力説した。さらに語を次いで、今や民主主義防衛戰は、歐洲、アジア、アフリカ、

濠洲の四大陸に互つて展開されつゝあり、残る一大陸たる西半球に對しても、獨裁國家群の侵略はすでに開始されてゐる。その第一着手としては、謂ゆる第五部隊が、續々と西半球に送られつゝある、と樞軸側の攻勢を張し、我々の行動、政策は擧げてこの外力の脅威に對處せねばならぬ」と強調してゐる。そして總ての國內問題はこれと全く不可分の關係をもち、今後米國の急速に採るべき國策の要諦として、次の三項を掲げてゐる。

- 一、米國々防の完成
- 二、地域の如何を問はず、被侵略國の全面的援助
- 三、侵略者又は宥和主義の提唱する和平案の拒否

そして、右の目的遂行に關して要する尨大な新豫算を要求すると共に、被侵略者に對する援助武器資材の増産に必要な資金を併せ要求する旨を述べたのである。舊臘發表された謂ゆる「武器貸與案」としては次の如き提案が行はれてゐる。

「かれ等は兵力を求めてゐるのではなく、數十億ドルの武器を必要としてゐるのである。そして、かれ等がこの武器のために現金を支拂ひ得なくなる時はすでに近づいてゐる。しかし、我々は彼等に對し、その必要とする武器のために、現金が支拂へ得ないばかりに、降伏するも止むなしとして、見殺しにするやう

のことは出来るものでない。

ドルで貸して、ドルを返して貰ふといふやうな借款供與なくして、かれ等が米國自身の國防計畫と睨み合せて、その必要とする軍需資材を注文することを提唱する。しかも、これ等の資材は、やがてその大部分が、同時に米國自身の防衛に役立つ時が来るであらう。資材のどれだけを國內に留保し、どれだけを國外に送り出すかといふ點は、陸海軍の専門當局に委すべきが當然であらう。我々は民主々義防衛線に送り出したそれ等の物資に對しては、戰爭終結の曉において、適當の期間内に、同様の外資乃至かれ等が生産したもの、或は我々が必要とする物資を以て返済を受ける。」といふのである。

この大統領の意圖は、明かに對英援助の目的と米國自身の國防強化とを併立せしめやうとするところに重點があり、宛然、「米國をして民主々義の兵器廠」たらしめんとする所に狙ひを置いてゐる。かゝる提案には、英國としても、「有る時拂ひの催促なし」の公約を與へられたわけだから、恐らく隨喜感嘆の涙を流してゐるに相違ない。

そして、また更に、「米國の對英援助は決して戰爭行爲を意味するものでなく、たゞ米國民の將來の幸福を效果的に保障せんとするものに止まり、米國の運命と對英援助とは絶対に不可分のものである。」と切言し、米國の欲する新秩序なるものは、獨裁國家群の企圖する新秩序とは、全くその方向を異にするものだ

と結んでゐる。

以上、一般教書の概略内容であるが、全文を通讀して、まづ第一に感ずることは、豫期に反して、その表現の調子が頗る微温的であり、言ひ廻はしに一方ならぬ苦心を費した跡が窺はれる。しかも、その論旨の大部分は、舊臘行はれた謂ゆる「爐邊閑話」を敷衍した程度にすぎず、さして新味なき低調なものである。そして、なほ極東問題については、(ハル國務長官の演説は別として)直接には一言も觸れてゐないことは、日本に對する無用の刺戟を誘發することを避けるに努めた結果のものであるかも知れない。要するに、本教書を煎じ詰めれば、大統領の意圖は積極的參戰を望まないとするも、自然、道は其處に通ずるものと解されるのである。

教書に對する米國々内の反響はどうであるかといふに、與黨である民主黨議連は、一部の孤立派を除いては、全幅的支持の側に立つてゐるのは當然であるが、共和黨側では一般に批判を避けて沈黙を守つてゐる。併し反政府黨の意見を打診的に綜合すれば、大體、「對英援助の行きすぎから、參戰の餘儀なきに至るべきを怖れ、ひいては、民主々義の本山たる米國に戰時獨裁制の採られる日の至るを危懼する」にあるらしい。

新聞論調に至つては、大勢は賛意に傾いてをり、ニューヨーク・タイムス紙の如きは、「大統領が全面的

に民主々義援助を表明したことは、米國にとつて健全な且つ必要な政策であり、米國民の壓倒的多數の支持するところである。この教書こそは深き信念と固き決意の發露である」としてゐる。一方、反對紙の所論を拾つて綜合すれば、「米國の對英援助は、假りにドイツが撃退されて、英本土上陸を斷念して、英國の安全が確保されれば、これを以て満足するといふのであるか。それとも既に歐洲の民主々義國家群の失つた地域又は國境を、今次の開戦前の状態に回復せよば已まないといふのであるか。これらの點について大統領はその範圍と限度を明確にしてゐない」と不満を洩らしてゐる。なほ、教書中に示唆された對蔣武器貸與案に關しては、ワシントン政界の觀測によれば、對英援助に全力を傾ける結果、事實上、今後はそこまでは手が廻はるまいとされてゐる。また米國經濟中樞たるウォール街方面の反響は、教書公開の翌日、株式市場に參戰懸念の増大から、思惑熱の冷却となつて現はれたのである。

## 六、米國の國防豫算

一月三日の一般教書に續いて、八日には、總額百七十五億ドルに及ぶ豫算教書が發表された。

その内譯をみるに、歳入總計八十九億七千百萬ドル、歳出總計百七十四億八千五百萬ドル、(減債基金繰

入額を除く) 差引き歳入不足八十五億一千四百ドルであるが、これを前年度に比する時は、歳入十三億一千八百萬ドル、歳出四十二億八千三百萬ドルのそれ、増加を示し、歳入不足においても、前年度の五十五億四千九百萬ドルに比し、實に二十九億六千五百萬ドルの多額に上り、米國が直面する非常事態の様相を端的に反映せしめてゐる。

新年度の歳入、歳出の内譯を前年度のそれと對照すれば、左のとほりである。

△歳入	一九四一—四二年	(單位百萬弗) 一九四〇—四一年
線歳入	八、九七一	七、六五三
純歳入	八、二七五	七、〇二二
國稅收入	八、五〇〇	六、八一七
關稅收入	二九五	三〇二
△歳出		
線歳出	一七、四八五	一三、二〇二
(減債基金種入額を除く)		
純歳出	九、二一〇	六、一八九
各省豫算	九五六	九六五
一般公共事業費	五〇二	五七〇

國防費	一〇、八一—	六、四六三
大戰出征軍人恩給	五六四	五六〇
農林救濟費	一、〇六一	一、一〇六
青年訓練費	三六二	三六九
社會保險費	四六二	四三〇
失業救濟費	一、〇三四	一、五〇一
公債利子費	一、二二五	一、一〇〇

なほ、ル大統領は次の諸點を明示してゐる。

- 一、豫算總額、約七十五億ドル
- 一、陸軍は、最新型裝備を有する百四十萬の常備軍建設を目指す
- 一、海軍は、世界最強艦隊の建艦を繼續するため兵員倍加を企圖す
- 一、陸海軍とも航空勢力の増加を準備する。
- 一、軍需生産の大擴充
- 一、一九四〇、四一、四二年間の國防計畫の實際に要する費用支出は、二百五十億ドルを超える豫定
- 一、侵略者に抗爭しつゝある民主々義國援助のため、豫算以上の支出を必要とする場合を豫想

一、本年度總豫算の中、六十二パーセント即ち百十億ドルは國防計畫への支出に充てられてゐるが、究極においては、どの程度まで膨脹するかは確言し得ない

一、軍事的要求の支出増大により、公共事業救済事業方面は縮少される

一、尨大支出を賄ふには、その大部分は募債方法により、他は累進税の徴收による

今次米國の國家豫算は、徹頭徹尾、劃期的に國防計畫の實現を目指すものであるが、また、ルーズヴェルト大統領の述べたる如く、民主々義自體の全面的防衛策を強化する立場において、可なりの高度を加へて立案されたものである。

國防費の飛躍的累増は、當然、豫期されたところで、その内容は左のとほりである。

	一九四一—四二年	一九四〇—四一年
國防費	一〇、八一—	六、四六三
海軍	三、四四七	二、一三六
陸軍	五、九五六	三、八四五
その他	四〇七	三八一
追加	一、〇〇〇	一〇〇

軍事豫算の細目に關しては、未だ明かにされてゐないものが多いが、その判明せる分としては、

- 一、非常總員の軍需品増産費 五億ドル
- 一、陸軍航空隊諸統費 十六億ドル
- 一、海軍航空隊諸統費 四億三千萬ドル
- 一、パナマ運河開鑿促進費 八千萬ドル
- 一、太平洋諸島防備強化費 一千八百萬ドル

等々が擧げられる。

この豫算の特質として注目し得る點は、戰時豫算の最高レコードたる一九一九年度に比しても、僅か一億八千七百萬ドルの減少を示してゐるに過ぎない。すなはち、米國史上第二位の大豫算が計上されたわけである。さらに數十億ドルの臨時支出が、對英援助費として追加されることも、自明の理として肯かれるところであるが、もし、これが加算される場合は、古今未曾有の一大豫算となるのである。

しかしながら、限度を超えたる對英援助の犠牲に對しては、國內に相當喧しい反對の聲も起りつつあり、如何なる形式、名目で提出されるかは問題となつてゐる。なほこの尨大豫算を、如何に賄ふべきかについても、米政府當局が頗る苦心を要するところのもので、假りに、ル大統領の言明するとほりに、増税および新赤字募債の方法のみにより、米國民をして均等的に負擔せしめらる時は、一人當り實に四百四十ドル

に達し、わが日本の一人當り米貨換算約七十ドルに比すれば、雲泥の差ある過重の國民負擔と云はねばならない。

二三

叙上の「一般教書」並に「豫算教書」に對して、英國はその最大限の對英援助表明により、英國の朝野が擧つて雀躍欣舞したのは當然である。英國官邊では同教書はドイツの侵略行爲に向けられてゐるばかりでなく、日伊兩國にも積極的挑戰の決意を明かにしたものととして重視してゐる。併し直接攻撃の矢面に立つドイツの新聞界では、この教書に對する批判はいかにと云へば、たゞその要旨拔萃して大冷笑を加へたにすぎない。そしてイタリーでは首相の代辯者として知られてゐるガイダ氏が、「ルーズヴェルト大統領は、一方に樞軸側が西半球侵略することの不可能を説きながら、他方に侵略の脅威を強調してゐる。これは自家撞着も甚しい。更に武器貸與案に關する大統領の期待は結局裏切られ、英帝國の崩壞によつて、その償還は不可能に終はるであらう」と指摘してゐる。

## 七、米國と東亞及び太平洋

纏つて、米國從來の對外政策について検討するに、その政策の基調ともいふべきものは、米洲においてはモンロー主義、歐洲に對しては不干涉主義、また極東に對しては門戸開放主義である。このうち、最後のものは、歐洲に對するそれとは異なり、明かに干涉主義であり、介入主義である。これは要するに、獲物が多く、比較的抵抗力の少ない極東方面に對して、アメリカ帝國主義がその排け口を求めたことを意味してゐる。すなはち、門戸開放の主張は、米國の支那大陸への自由進出の要求に過ぎないものであり、米國は早くから、東亞一帯の地を自己發展の活舞臺として規定し來つたのである。

かくて、米國の東亞進攻態勢は、古くは嘉永六年、一、艦隊を差向けて日本に開國を迫つた前後から窺はれ、更に、一八九七年ハワイを併合し、翌年フィリッピンを略取して以來、一段と拍車を加へられたものである。そして日露戦争直後から漸次に新興日本に對する壓迫政策に轉じ、日本移民禁止問題、桑港における日本學童排斥問題等を惹起し、第一次大戦直後には、日英同盟の廢棄を策すると共に、海軍の謂ゆる五・五・三比率を強制し、四國條約、九國條約等によつてわが行動の自由を束縛し、やがて、滿洲事變にお

けるスチムソンの干渉政策となり、今次の日支事變に際して更に一段の介入主義にまで發展したのである。昭和十二年七月の、ハル國務長官の第一次抗議聲明、同年十月の、シカゴにおけるル大統領の隔離演説、翌十三年六月の武器、飛行機、その部分品等の禁輸、十四年六月の一方的の通商條約廢棄通告、昨年九月の飛行機用ガソリン、十月の鐵鋼及び屑鐵の禁輸等々となつて、ますます對日干渉壓迫の手を強化したため、遂に大小六百餘件に上る對日抗議を重ねる始末となつた。

更に三國同盟成立の前後から、その對日壓迫は、莫大な援蔣借款の供與、ビルマ援蔣ルート再開の尻押し、極東在留民の引上げ、軍需資材や空軍の極東への移送、マニラの軍備強化、日本と蘭印との通商を議妨害等々から、今や、進んで英國との共同戦線によるあらゆる不穩な壓迫政策が、殆んど逐日、次から次へと講じられてゐるのである。

米國のかゝる動きは、もはや單にその極東權益の擁護とか、ゴム、錫等の原料通商路の保全とかいふ如き、純經濟的意義を全く超越したものであり、明かに英國に代つて、或は英國と共に、アジア並びに西南太平洋における兩國共同の勢力を確保せんとする意圖であり、すなはち裏を返せば、日本の大東亞共榮圏建設の進展を打壊せんとするものである。こゝに米國帝國主義の正體がまざまざと曝露されてゐる。

翻つて想ふに、アメリカ帝國主義の活躍舞臺は、中南米を除けば、主として太平洋と東南アジアである。

大英帝國の領土は、主に西南アジアから太平洋に散在してゐる。印度、マレーから、南洋、濠洲、ニュージーランド、そしてカナダに及ぶ英帝國領土の配置は、半ばアメリカ帝國主義勢力と交錯しつゝ、一大アングロサクソン・ブロックを形成するとともに、太平洋をして、將に第二の地中海たらしめんとしてゐる。そしてこの地中海の制覇こそは、謂はば世界制覇の關鍵をなすものであり、もし、英國がこの海域において覇權を喪失するならば、米國は當然これに代行せざるを得ない地位にある。のみならず、太平洋は英帝國領土間の聯絡ルートとして重要であるのみではなく、米國の對アジア通商路としても重要である。米國が北太平洋や東太平洋の海、空軍基地の特設や強化を圖ると共に、西への太平洋横斷航空路、アリユーシャンから、南下して濠洲に至る太平洋縱斷航空路等の實現を急ぎ、殆んどその完成を告げんとしてゐるのも、畢竟これがためである。

殊にわれわれは、早くも華府會議當時、英、米海軍密約が成立してをり、米國は主に太平洋を、英國は主に大西洋その他を受持つことになつてゐる事實、そしてシンガポール軍港の共同使用乃至米海軍への提供までが、當時すでに取極められてゐる事實を惟ふならば、米國と太平洋との關係が、いかに緊切なるものであるかを、十分理解し得るのである。

かくして、太平洋の重大性は、英米全く共通のものであり、従つて、この水域に逐日勢力圏を擴大しゆ

く日本は、三國同盟は暫く別としても、當然、英米共同の敵でなければならぬ。ハル國務長官の如きは、日米の對立抗争は、宿命的のもので、如何ともし難いものであると、最近、しみじみかれの親近者に洩した由であるが、まことに故あるかなといはざるを得ない。

### 八、對日・英米協力の擴大

英本國の危機は漸次緊迫しつつある。そして米國の援英態勢はますます強化されつつある。従つて、英米危機の重點は、差當り大西洋側にあり、兩國の精力は主としてこの方面に傾注さるべき筈である。しかるに、最近、英、米昨今の動向を看るに、西南兩方面に互つて著しく攻勢を示し、殊に米國の態度はその重點を、むしろ太平洋方面にのみ置くかの如き印象を與へてゐる。しからばこれは何故であらうか。東を守り西に進まんとする米國本來の性格も、その一つの理由ではあらう。また、日本は今支那事變に釘づけされて、自由に動けぬと見てゐる點もあらう。更に日本の戦時經濟の大半は、英、米、特に後者に依存してをり、この弱點に強壓を加へれば、日本は容易に屈伏すると錯覺してゐる點もあらう。中んづく日本經濟力を脆弱なりと見るかれ等の對日過小評價が大きな原因をなしてゐることは十分に想像される。

だが、われわれは、他に一層重大な理由の存することを信するものである。それは、彼等が英本土喪失の場合を豫想しての遠大なる對策である。

歐洲戦局の發展が、結局において、英の本土開け渡しを餘儀なくするものとすれば、米國援英政策は、少くとも、大西洋方面においては無意味に歸し、いよいよ東はただ守るのみで、自然、主力を専ら西に向ければならないことになる。

米國の識者は、英國の敗退を既に豫見してゐる。それにも拘らず、米國がますます援英強化を叫びつゝあるのは、要するに、援蔣政策の場合と同じく、出来るだけ歐戰を長引かせ、その間に、自國軍側の増強を圖り、同時に、敵側の戦闘力を殺ががためであるとして差支ない。否な、一方で英國の海軍力を留保し得る限り、英國の敗戦によつて、その手に熟柿の落つるを待つといった野望も、内藏されてゐないとは斷言出来ない。

いづれにしても、英國の決定的敗戦の場合、何より必要なのは太平洋一帯における英領植民地を、英米協力の下に確保し、こゝに英國再建の方途を講ずることである。これは英國にとつて唯一の更生策であると共に、私かに英國財産の繼承者を以て任ずる米國にとつても、極めて重要な問題でなければならぬ。蓋し、太平洋は英國の胸體であると共に、米國の最大榮養源でもあり、寶庫でもあるからである。

さうである以上、今から太平洋に備へることが最も肝要であり、従つて、日本勢力の伸長を、極力必死的に抑制することが緊急事である。

かく解することによつてのみ、かれ等の太平洋進攻態勢と、兩者の協力的策謀とが、十分その意義を明かに發揮することになるのである。

米國は新たに一億ドルの援蔣借款を設定した。英國もまた一千万ポンドの援蔣借款供與を決定した。のみならず、英國は、その本土の危機を目前に控えながら、今さら、シンガポールに極東軍司令部を新設し、ポーラム大將を派遣して、南支、南洋一帯にわたる海、陸、空軍の綜合作戦に備へることになった。また、蘭印を英米の翼下に確保すべく、排日工作を進め、タイ國に對しては、軍事協定の締結を強要すると共に、他面、經濟壓迫を以てこれを威嚇し、佛印南部に對しても極力反日的策謀を試みてゐる。いふまでもなく、すべては、日本の南進阻止、東亞新秩序破壊を目的とするものであり、その狂奔ぶりは、宛ら、開戦前夜の感をさへ深からしむるものがある。

端的にいへば、米國はまだ十分の戦争準備を有してゐない。國民も戦争には反對してゐる。また、米國は巨大なる經濟力を頼んで自國の實力を過大評價してゐるが、いざ、戦争へとスタートを切るには、まだ國民の緊張が缺けてをり、國內の統一も行はれてゐない。こゝに詳述の暇はないが、事實、米國ほど、

内面的に危険を孕んでゐる國は稀れであり、現にコミンテルンは、米國を以て赤化の前進基地とさへ稱してゐるのである。米國には一貫せる傳統もなく、百種以上の異民族を包容し、四十八の半獨立州から成り、宗教も雑多を極めてをり、他方、反戦主義者もあれば孤立主義者もあり、その上、約一千万の失業者を擁してゐるのである。それほど、その内部は不統一を極め、その經濟機構も矛盾に満ちてゐる。さらに、金融財閥、産業資本家、中小企業家、農民、労働者、共産黨員等々、利害と見解を異にする層があり、地方的にも歩調の一致を缺いてゐる。そして、強制徴兵制に對する青年や父兄の不滿も漲つてゐる。かゝる亂脈なる國內態勢においては、一部の好戰的財閥や軍擴主義者の威令も、さう簡單に行はれる筈はないのみならず、歐洲政局の發展につれ、米國は歐洲及びアフリカとの經濟的聯繫を失ふ惧れもあり、中南米の向背また必ずしも樂觀を許さぬものがある。

叙上、幾多の事實に照して、米國の參戰はそれ自身にとつて絶大の危険を宿すものといはねばならない。しかるに、米國が、東亞における日本の聖業の眞意を曲解し、侵略國の汚名を押し付けて不當の壓迫を敢てするなどは、誠に思はざるも甚だしいはなければならぬ。窮鼠猫を噛むといふが、況んや、窮鼠などとは類を異にする日本が、或る段階において堂々反撃の壯舉に出た場合、米國は果して狼狽せずして済むであらうか。もし、日本が最後までかれ等の壓迫に甘んじ、或はその壓力下にひれ伏すものと思ふなら

ば、それは誠に危険極まる錯覺である。去る十二月四日に、共和黨のハイラム・ジョンソン氏は「米國政府當局は、戦争には逃へ向きに出來てゐる。だから、米國が會戰することは疑ふ餘地がない」といつてゐるが、確かに、現在のまゝで進むならば、米國はやがて二正面に敵を迎えて苦しまねばならぬことにならう。

米國にしても、英國にしても、抑も日本に何を求めんとするのであるか、支那大陸から完全撤退を求むるのであるか。日本を支那大陸にまでおびき出し、三年有半に互る戦禍を招來せしめた根本の責任者は、かれ等自身ではなかつたか。蔣政権を煽動して、隣邦相喰ましむるに至つた責任の大部分は、正にかれ等自身が負ふべきではあるまいか。公明なる神の審判は、むしろかれ等をこそ侵略者と斷せぬであらうか。

それはともかく、いま、日本が假りに支那から完全に手を引いたと假定して、その後一體何が起るであらうか。それは支那、滿洲一帶に互る赤化勢力の氾濫ではある。武装された共産軍と戦ひつゝあるものは、世界を通じて、單り日本のみである。そして、少くとも、極東においては、日本のみがこれをよくするものである。日滿支提携の下に、東亞永遠の和平と合理的秩序とを建設せんとする日本の代りに、赤色支那を誕生せしめることによつて、英、米に果して何を得んとするのであるか。日本は決して、東亞から英米を閉め出さうとしてゐるのではない。たゞかれ等從來の東亞植民地觀と、帝國主義政策の徹底的修正を要求してゐるのみである。日本の東亞新秩序建設によつて、かれ等は正しき意味において、斷じて何物

をも失ふ筈はない。

しかるに、未だにこの見易き事理を解せず、われに對して無用の挑戦を敢てするかれ等こそは、全面的世界戦争の誘因を作り、惹いては人類世界を廢墟と化せしむるに至るであらう。われ等は英、米、特に後者に對して、極力、冷靜なる反省を求めざるを得ない。

### 九、日支事變の現段階

以上數節に互つて、歐洲戦局の發展を英米の動向について、一應の検討を試みた次第であるが、次に、日支事變の現段階について、若干の考察を加へておきたい。

昨年十一月三十日、南京政府太禮堂において、日滿支三國代表臨席のもとに、日支基本條約の調印が行はれた。この條約は、昭和十三年末發表された謂ゆる近衛聲明の旨趣に基き、善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則を具體化し、支那の完全獨立を保障すると共に、日、支相ひ提携して、東亞新秩序の建設に邁進せんとする決意を表明したものである。

それは、不割讓、無賠償の原則に立ち、相互扶助、共存共榮の新方式を具現せるものとして、實に劃史

的の國際條約であり、従つて、日本及び新國民政府の、新らしき國際的道義精神を體現してゐるものである。殊に本條約調印と共に、日滿支三國の共同宣言が發表され、こゝに滿支が晴れて相互承認をなすに至つたことは、特筆大書さるべき歴史的慶事である。そしてこの共同宣言によつて、いよ／＼日、滿、支三國は強靱なる東亞の一大平和樞軸として、また、大東亞共榮圈樹立の協同推進力として、一路邁進の態勢を示すに至つた。

かくて、この條約の成立を契機として、支那はこゝに正式中央新政府の確立を見、活潑なる建設的新段階に突入したのである。

しかし乍ら、現實には、なほ、抗日支那がそのまゝの姿において殘存し、しかもそれは、單なる支那内部の一反對勢力ではなく、世界的規模における一大國際勢力の一環として立塞つてゐるのである。日、獨、伊三國同盟の結成を契機として、世界は劃然對立する守舊、革新の二大陣營に分裂せんとしてをり、東西個々のすべての勢力は、やがて、そのいづれかに合流せざるを得ない運命にある。従つて、新國民政權と重慶政權との對立も、今や世界的二大陣營對立の一部面に過ぎないものであり、こゝに支那事變の持つ國際性と、併せてその長期性とが明白化し、東西に互る國際的關聯を離れては所詮事變解決の道なきを示すに至つたのである。これが實に、支那事變のもつ現段階の特殊的意義であり、特殊的性格である。

隨つて謂ゆる支那事變の處理といひ、蔣政權の打倒といふも、それは決して局部的な孤立的の問題ではない。その解決も亦た世界的規模における長期建設の大業であり、一面戦争一面建設の半永久的過程である。従つて、中國新中央政府の成立も、かゝる長期建設過程の一礎石、一道標たるに過ぎないものであり、それ自身問題の解決とはならないものであつて、たゞ問題の解決への一つの寄與となり、一つの要因となるに過ぎない。眞の建設、眞の解決はまさにこれからである。かくしてわれ／＼の事業は、むしろ、ますますその重量と時間のスケールを擴大せんとしてゐる。

そこで、更に問題となるのは、現在の様相とこれを繞る國際關係とである。

重慶政權は、現在内部的不統一と分裂の危機とに悩まされてゐる。共產黨の壓力による國共對立の深化はいふまでもなく、中央と地方軍閥の歩調の不一致、親ソ派、親英米派、和平派、抗戰繼續派、その上親獨派などの動きもあつて、甚だ混亂を極めてゐる。元來、重慶政權は、それ／＼立場を異にする列強の支柱によつて支へられ、その支柱の一々の動きによつて、動搖を免れ得ない存在である。事變の當初においては、英、米、佛、ソ、そして獨、伊に至るまで、凡そ歐米列強の全部がその支柱をなしてゐた。が、その後、獨、伊の支柱が全く撤せられ、最近はフランスのそれも取り外づされて、むしろ蔣政權とは對立的勢力に轉化し、殘るところは、英、米とソ聯のみとなつたのである。

その結果、特に昨年六、七月から蔣政権の大動搖を來たし、また、最近では三國同盟の成立並びに、ベルリン會談による獨、ソ再接近の形勢において、更に顔色を失へる觀があつた。

しかしながら、他方、この形勢に對する反擊として、英、米の對蔣積極支援の情勢を喚起し、ビルマルトの再開、米の相づく對蔣借款供與、軍需資材の積極的供給、英、米協力による對日牽制の強化となり、ソ聯もまた、差當り従來の對支方針に變化なきことが示されるに及んで、重慶は再び生氣を取り戻した觀がある。そして、蔣政権が、東亞共榮圏内における歐米的擾亂勢力として、飽まで抗日を繼續する限り、これ等の三大援蔣支柱はむしろますます強化されんとする態勢にある。従つて、本來、歐米諸勢力の傀儡として起ち上つた蔣政権は、飽まで抗日一點張りで進む外には生存の道なき運命にある。すなはち、蔣政権は、全くそれ自身の意志によつて、行動するの自由なく、ひとへに、その支援的諸勢力の意向と情勢によつて、或は右偏し、或は左行せざるを得ない。

しかりとすれば、支那問題の解決は、蔣政権に對する實力的討伐のみによつて期しうるものではなく、蔣政權内に織りこまれてゐる國際勢力に對する力の關係によつてのみ決定さるべき事柄である。換言すれば、世界新秩序勢力の一環としての東亞新秩序勢力の消長が、問題解決の關鍵となるのである。曾ては、互ひに相反するとさへ思はれた支那問題と南方問題との、相互不可分關係もかくして理解されるわけであ

り、かゝる觀點において、日本の南方問題解決の新方式が迅速に要請されるわけである。

この故に、謂ゆる南方問題の解決策は、多分に帝國主義的色彩を帯ぶる、單なる經濟的乃至戰略的必要といつた範疇に止まることを許されない。それは當然、謂ゆる八紘一字の大精神に基づくところの、東亞諸民族の解放と自立、それによる共存共榮樹立への自主的相互協力といふ、嵩高なる指導理念の具體化を目指すものでなければならぬ。われわれの政策の根柢に、この堂々たる理念の燃焼があつてこそ、われわれは英米流の功利的策謀に打勝つて、眞にアジア民族を覺醒し、心からの信頼と協力を期待し得るのである。われわれは當面の必要のみに心を奪はれて、單に經濟とか戰略とかの一面に執し、南方を支配するものは世界を支配するといつた、帝國主義的野望に墮してはならない。また事實、それではアジア被壓迫諸民族の、民族的要求を充たし得ず、大東亞共榮圏の樹立は、羊頭狗肉の一片の口頭禪に終らざるを得ない。歴史的大事業、長期的大創業には、萬人をして承望せしめ得るだけの整然たる理想と、犠牲的大精神とが絶對不可缺である。國際的行動と雖も、苟もそれが劃史的維新を志すものである限り、低調卑俗なる實利觀念のみを以てしては、その目的を達成し得る筈はない。

われわれは、支那事變の新段階がますますその歴史性と世界性を深めた事實を確認すると共に、われわれの諸政策を、すべてより高き理念によつて裏づけ、絶對不敗の大信念を捧持しつゝ、救世済民の聖戰

を戦ひ進めなければならぬ。かく信じ、かく行ふことにおいてこそ、始めてわれわれは、真に世界心の大道をゆく最後の勝利者であり、真に博大な不退轉聖業を完遂し得るのである。

### 十、注目すべきソ聯の態度

現今の國際情勢乃至國際陣營において、その向背去就の最も不明なるものはソ聯である。世界は今やソ聯の動向に最大の關心を拂つてゐる。

現在、東西において戦はれつゝある戦争に對し、列強中最も中立的の立場にあるのは、獨りソ聯のみである。英、佛、獨、伊、日の五大國はいづれも戦争の渦中にあり、その圏外に残存する大國は、米國とソ聯とであるが、米國はすでに半ば參戰國と稱し得るほど戦争に深入りしてゐる。事實かれは英國との協同において、第二線で戦つてゐる。

しかるに、ソ聯のみは、自己の利益のために多少の兵力を動かしたとはいへ、その國力に影響するほどの何等の犠牲も拂つてはゐない。否な、ドイツとの經濟提携と、ドイツに對する好意的中立とによつて、最も多くの分け前を得たものはソ聯であり、かれは殆んど、勞せずして肥え太りつゝある。戦ひつゝ太る

ドイツよりも、戦はずして太るソ聯こそは、最も幸運なる投機者である。同時に、かれのみが戰渦の圏外に立ち、謂はゞ國際競技の一等觀覽席に納まつてゐる以上、二大チームの勢力の比重は、ソ聯が、やがていづれの陣營に参加するかによつて、重大な變化を齎らすのである。かくして、ソ聯の國際的地位は、今や千鈞の重みを加へ、かれをその陣營に引込みうるものが勝算を持ち得るかの感を深めてゐる。

従つて、ソ聯は、今や、二大陣營間の誘引の的となり、泰然、高く持して容易に動かす、自己の欲するまゝに行動し、去就を決し得る有利な地歩を占めてゐる。要するに、ソ聯は、國際爭覇戰のキャスティング・ヴォートの把持者として、その一舉一動が世界環視の中心となつてゐる。

しかし、大體、ソ聯は、歐戰直前において、英佛の懇望を斥けてドイツと結び、特に最近のベルリン會談以來、その關係は一層強化されたものと見られてゐる。勿論、謂ゆるベルリン會談の内容は未だ全く不明ではあるが、とにかく、昨今の微妙なる世界政局下において、ソ聯の首相兼外相たるモトロフ氏が、從來の慣例を破つて外國の首都ベルリンに乘込み、三日間に互りヒトラー總統と會談を遂げたといふ空前の事實は、兩國の再接近を意味するものであり、またそれを通じて、ソ聯を獨伊樞軸、または三國同盟への接近をも示唆するものである。この事は、その後におけるドイツの活潑なる外交攻勢、特にバルカンに對するそれによつても證明されるのである。

しかしながら、問題は、右の如きソ聯の行動が、如何なる動機によるものであり、また、如何なる程度におけるものであるかといふことである。

昨年九月末成立した日、獨、伊三國同盟條約は、特にその第五條において——三締約國の各とソヴェート聯邦との間に現存する政治的狀態に、何等の影響をも及ぼさざるものなることを確認——すと、三國とソ聯との融和提携を開いてゐる。のみならず、この條約内容は豫めソ聯に内示されたものであり、ソ聯側の諒解を得たものと思はれる節がある。尤もこの三國同盟條約は、本來、純然たる防禦的性質のもので、新秩序運動に同意するすべての國との協力を歓迎してをり、米國に對しても、その米洲モンロー主義とは何等抵觸してゐない。それほど、元來、道義的、非排他的のものではあるが、特にソ聯に對しては、和親外交の態度を表示してゐると解されるのである。

従つて、少くとも、ソ聯は、この條約の成立によつて何等の脅威も感せず、むしろ進んで親近の手を差延べ得る筈であり、また、大體においてその傾向が窺はれるのである。

謂ゆるベルリン會談に於ては、獨、伊の對バルカン工作の承認、ソ聯の近東を通ずる海への進出承認、東西における二大共榮圏とソ聯の勢力圏との相互承認、ソ聯の英印、イラン方面への進出默認等が談合されたと傳へられてゐるが、少くとも、歐洲方面では、樞軸側にたいするソ聯の一段の接近は事實であり、

英國の執拗なるソ聯誘引策も、結局、失敗に終はるるのではなからうか。他方、米國もまた、ソ聯との經濟關係を頼りとして、盛んにソ聯抱込みに熱中してをり、ソ聯もまた専ら經濟部面における米國利用を策してゐる模様であるが、それも、今のところ米國の要望には全面的に應ずる氣配はない。

歐洲政局の現状においては、苟もソ聯が歐洲に關心を持ち、バルカン、近東に多大の留心をもつ以上、かれに對して好意的な獨伊樞軸に強いて背を向け、これ等との對立關係に立つことは、徒らに、自己の危険を増すのみで何等の得るところはない。従つて、少くとも、歐洲においては、ソ聯が、英米側に組み入ることは、當分あり得ないと見るのが常識である。

しかしながら、東亞方面においては、現前、ソ聯の從來の態度に格別の變化は起つてゐない。例へば、昨年十二月五日にソ聯政府は、日支基本條約が成立しても、ソ聯の對支政策は何等從來と變化なきことを公式に聲明し、援蔣政策にも依然變りはないことを明かにしてゐる。のみならず、米國の對蔣一億ドル借款供與と相呼應して、英ソ兩國もそれ〴〵三百萬ポンドの對蔣新借款供與を決定したとも傳へられ、また、米、ソ、重慶三者間の相互物資輸送について、ウラジオ經由シベリア鐵道の利用についても、協議が行はれたと傳へられてゐる。米國や重慶との通商的關係は別問題として、對支政策に何等變化なしとの聲明は、わが建川新大使の赴任によつて、事實、日ソの新交渉が進められてゐる現在において、何等かの掛引であ

るとしても、われ等には聊か奇異の感じを興へざるを得ない。また、日ソ新交渉も豫期に反して、捗々しき進展を見せてはゐないやうであるが、ために、重慶の親ソ派に對しても、多分に對ソ策動の餘地を興へてゐるのである。

かくして、三國同盟の結成によつて、日、獨、伊の一體化が明かにされた今日でも、ソ聯の西における政策と、東におけるそれとの間には、なほ相當の開きがあり、ソ聯の對日獨觀にも、若干輕重の差あることが想像される。しかしながら、ソ聯の地理的位置から見て、軍事的にも、經濟的にも、東西の二大新秩序國は共にこれを看却し得ず、友好親善の關係に立つことが、有利でもあり且つ自然でもある。換言すれば、やがて、東西に展開さるべき新秩序國と、ソ聯ブロックとは、經濟的にも相互依存關係に立つべき運命にあり、軍事的にも、敵對關係に立つことは、ソ聯にとつて甚だ危険な筈である。蓋し、ある意味では、ソ聯は、日獨伊三國勢力圏によつて包圍されてをり、他方、英、米は地理的にも、性格的にも、長くソ聯の友邦たり得ない運命にあるからである。(これ等の點については後段再説するであらう)

従つて、大局的には、ソ聯は東西いづれを問はず、可及的同盟側との摩擦を調整し、融和接近の方策に出るのが當然であるかと思はれる。

## 十一、日ソ關係の調整

上述の如く、ソ聯現在の最も有利にして且つ微妙なる地位は、二大國際陣營の誘引の對象たると共に、相手に最高値段を要求し得る立場でもある。従つて、易々と相手の要求に應じないことも想像される。特にソ聯は、日本に求むるところ少く、日本こそ、ソ聯に求むるところ多しと信じてゐるもの如く、従つて、その徹底實利外交の特徴に照し、日ソ外交の多難さを思はせるものがある。

モトロフ首相は、昨年八月一日、ソ聯最高會議席上の外交報告演説において、日ソ關係が、近來やゝ正常化しつゝあることを述べたあとで、

一日ソ兩國が相互の利益を承認し、且つすでに必要のなくなつたある種の妨礙物を除去する必要について、理解を深めれば深めるほど、それだけ兩國々交の改善は可能となつて來るであらう云々(同盟通信)

と語つてゐる。

歐戰の勃發、それを契機とするノモンハン協定の締結、滿蒙國境劃定委員會の成立等々を通じて、日ソ

間の險惡な空氣が漸次緩和され、最近、多少とも兩國接近の態勢にあつたことは事實である。且つソ聯としては、今のところ歐洲方面が問題であり、また、日本としても、ソ聯との無用の摩擦を欲せず、出来るだけ國交の改善を希望してゐる。殊に日本は、南方問題が、支那事變解決上ますます緊急化してをり、英、米の對日壓迫の増大と共に、出来るだけ、北方の不安を除去する必要を感じてゐる。また、三國同盟による經濟的相互援助の具體化についても、大陸輸送路の關係上、ソ聯の協力を絶對必要としてゐる。蓋し三國間の海上輸送路は、今や殆んど閉鎖状態にあるからである。従つて、日本は、ソ聯との關係調整を切望するものであるが、他方、ソ聯側は、日本の國力を過小評價し、日本の足元を見る傾きもあつて、差當り、日本に對し、多く求むるところなしとの態度を示してゐるかのやうである。客觀的に見て、昨今のソ聯の立場は強化されてをり、差迫つて、日本との親善を急がねばならぬほどの事情はなく、むしろ、日本に最大の讓歩を期待し得るとの見解に基く理由があるかもしれない。

- さて、日ソ國交調整については、少くとも次の如き數種の重要案件が兩國間に横はつてゐる。
- 一、北洋漁業權益及び北樺太鑛業利權問題の調整、
  - 二、滿蒙、滿ソ國境問題の解決、
  - 三、ソ聯國境駐兵の緩和問題、

- 四、日本と歐洲との連絡に關する問題、
- 五、支那新政府の承認問題、
- 六、ソ聯の對蔣援助禁絶問題、
- 七、不可侵條約締結の問題、
- 八、大東亞共榮圈の承認問題、

これ等の諸問題は、いづれも重要性を帶ぶるものではあるが、日ソ兩國が眞に遠く慮り、ソ聯が歐亞を貫く新秩序、新共榮關係の設定によつて、歐亞永遠の平和を實現すべく協力せんとする大乗的立場に立つならば、決して解決困難なものではない。

ソ聯に對する、日本側としての根本の肚はずでに極まつてをり、飽まで大乗的立場において望まんとしてゐることは、昨年十月七日の地方長官會議における、松岡外相の訓示演説によつても明かである。松岡外相はその中で、對ソ外交方針について、

「わが國とソ聯邦とは、從來いろ／＼な理由で關係が面白くなかつたのであるが、今日の如き世界革命ともいふべき變局に當つては、双方とも東亞の一角でいがみ合つてゐる時ではない。誤解があれば解き、懸案があれば解決して、もつと大きな目標に向つて協力すべき秋であると信ずる。ソ聯邦では、頻りに

他國のために火中の栗を拾はぬといふことが言はれてゐるが、これはいづれの國も同様であつて、今日の狀勢下において、日ソが相争ふくらゐ、世界の他の部分を喜ばせることはない……」

「今日の國際狀勢下においては、思想は國內問題であり、國と國との關係、すなはち、國際關係においては、一應は思想問題と引き離して、別個に取扱ふことを實際は餘儀なくされるのである。」と説いてゐる。

モロトフ首相の「すでに必要なくなつた或種の妨碍物」とは、果して何を意味するかは不明であるが、もし、それが三國防共協定であるとすれば、すでにソ聯は獨との提携があり、また、より緊密化された三國同盟がソ聯に對して親善の手を伸べてゐる以上、ひとり日ソとの間にそれが問題になる筈はない。日ソ側からいへば、むしろ、人民戦線時代の遺物たるソ聯の援蔣政策こそ、無用の「妨碍物」といはねばならない。とにかく今日では、日ソ親善を不可能なりとする不可避的理由はない筈である。勿論、前に列擧せる諸問題の解決は、その不可缺的條件ではあるが、これ等は日ソ兩國の用意乃至誠意の如何によつて、平和裡に解決し得らるべき事柄のみであると信ずる。

しかし、事實においてわれ／＼は、いま交渉中の日ソ條約が、しかく容易に成立しやうとは信せず、現

にその傾向を示してゐるやうに思はれる。そして、その根本的理由は、日ソ兩國の現在の立場の相違にもよるが、究極するところは、ソ聯特有の性格並びにその外交方針にあるといはねばならない。

## 十二、ソ聯の國是とその外交方針

ソ聯は一般に「謎の國」といはれてゐるほど、その正體は、一般に不可解とされてゐる。だが、戦争にしても、外交にしても、相手の正體を知らずに成功を期しうる筈はない。「われを知りかれを知る」は兵家の要道である。故に、われ／＼は、ソ聯との交渉についても、能ふ限りかれの本質を把握してかゝる必要がある。しからは、ソ聯とは如何なる國であり、現在如何なる實狀にあり、そして、その外交政策は如何に轉じつゝあるかといふことを、豫め検討してかゝらねばならぬ。

尤も、ソ聯の特質について、こゝに詳述の暇はないが、周知の如く、ソ聯は、プロレタリア階級による世界の共產革命をもつて、建國以來の國是としてゐる。マルクス・レーニニズムを信條とするソ聯として、これは當然のことであるかもしれない。

但し、現在のソ聯は決して共產主義國ではなく、一種の社會主義國である。但し、ソ聯の指導者の言に

よると、ソ聯は共產主義への過渡的形態として社會主義的立場を持してゐるが、生産力の無限の擴大と物資の豊富なる自給とを俟つて、共產主義の段階に突入する。しかし、眞の物資自給はソ聯一國內では不十分であり、従つて、共產主義の完全なる實現には、全世界をその圏内に包容する必要がある。故に、現在の一國社會主義はそれへの一階梯であり、全世界の革命を俟たずしては、眞の目的は達成されないといふのである。要するに、謂ゆる赤色帝國主義はこゝから發生するものであり、全世界をソヴェート化せねば納まり得ない立場にある。一言すれば、コムミンテルンの理想とする世界赤化政策こそは、ソ聯の終局目的を指示するものであり、ソ聯の國家百年の大計は、この點にあると見なければならぬ。

しかしながら、世界の現状においては、かゝる政策は到る處に摩擦を生じ、單なる思想煽傳のみで、その目的を達成することは出来ない。ソ聯は自ら社會主義の祖國、或は世界プロレタリアートの祖國と稱してゐるが、この祖國を守り、且つその勢力を擴大するためには、思想以外に現實の力を持たなければならぬ。また、それがためには、ソ聯自らを、軍備、經濟等のあらゆる點において武装し強化しなければならぬ。そして、こゝからソ聯の排他的な國家主義的性格が生れ、また、高度國防國家建設への努力も生れて來るのである。かれが、一面、國際的機關たるコムミンテルンと不可分の關係を保ちつゝ、他面、極めて排他的な國家主義乃至ソ聯至上主義に立籠る所以はこゝにある。一見、矛盾するが如きこの二つの面は、

ソ聯の立場においては、全く表裏不可分の關係にあるのである。

かくソ聯の國是が、世界の赤色革命にある以上、根本においてはソ聯以外の國は、すべてかれと對立的立場にあり、ソ聯からいへば、すべてが謂はゞ敵國であつて、これ等に對しては、何等の誠意も友情も感じ得ないかも知れない。従つて、ソ聯の一切の行動は、國內的にさへ、すべてが手段的、方便的であり、況んやその對外政策に至つては、ますます然かあるのが當然である。換言すれば、ソ聯の終局目的は決定的であり、その目的達成のためには如何なる手段も肯定され、他からの非難の如きは一笑に附しうるわけである。たゞ問題は、その手段が現實に有效であるか否かといふことで、それによつて可否が決定されるのである。結局において、善か、惡か、是か、非かといふことではなく、損か、得か、有利か、有害かといふことが、政治、外交等すべての國策の指導原理となるのである。ソ聯經濟の自足自給主義も、一見、封建的と思はれる鎖國主義も、獨裁政治も、實利主義外交も、すべては、かうした本質的立場から出發してゐるのである。試みに、その外交政策について、こゝに若干の検討を試みやう。

ソ聯としての外交は、その第一期とも稱すべき一九二〇年に、エストニアと講和條約を結んだのに始まり、漸次、隣接諸國と條約を締結し、東南方面では、アフガン、ペルシャ、トルコ等と國交を結び、一九二一年には、英國とも暫定通商協定を締結した。

その第二期たる、一九二五年以後の協調外交時代には、盛んに不侵略條約を結ぶことになり、トルコを始め、隣接諸國及び佛、伊等ともこれを締結し、一九二六年には、ドイツとの間にも中立條約が成立し、かくて極力列國との摩擦を避け、一路、國內建設に専心努力したのである。

やがて、一九三一年の滿洲事變、三三年のドイツ・ナチス政権の擡頭等による國際情勢の變化と共に、不侵略條約のみでは安んじ得ぬ情勢となり、一九三五年には、フランスとの間に相互援助條約を結び、また、チェッコとの間にも、同様の條約を結ぶに至つた。この期間はソ聯平和外交の最も花やかなりし時代で、クレムリンは東歐外交の中樞たるかの觀を早した。そして、この時期は、ソ聯の第一次、第二次五ヶ年計畫による經濟建設時代に相當するものであり、また軍備強化時代のそれでもあつた。

昨年八月以來、ソ聯外交は更に一大轉期を劃し、對外積極進出の態勢を示すと共に、その現實外交の特色を著しく發揮するに至つた。

一九三八年九月、ソ聯と互助條約關係國であるチェッコとドイツとの間に問題が起り、謂ゆるミュンヘン會議が行はれたのであるが、ソ聯はこの會議にも招かれず、また、チェッコを援助もせず、謂ゆる頰冠りて通した。やがて、一昨年三月、ドイツはチェッコの一部を併合し、スロヴァキアを保護國とし、更にメーメルを回收し、ダンチヒ問題でポーランドに迫るといふ有様で、歐洲の風雲甚だ急なると共に、英佛

は盛んにソ聯抱き込みに狂奔した。しかるに、ソ聯は、かれ等に背負ひ投げを喰はせて、一昨年八月、久しく仇敵關係と見られたドイツと、先づ貿易協定を結び、次いで不侵略條約を結んで、世界各國をして呆然たらしめた。これは正にソ聯外交の百八十度の轉廻を意味すると共に「他人のために火中の栗を拾はぬ」とするソ聯の實利外交の特色を遺憾なく發揮したものであつた。尤も、右は同年三月の第十八回黨大會における「ソ聯は平和及びあらゆる國との實務的連絡の強化を支持する」といふスターリン黨書記長の言明中にも、すでに示唆されてゐた方針であつた。

その後、獨のポーランド侵入が九月十日開始せられると、ソ聯は同月十五日愴惶として、ノモンハン停戦協定を日本との間に結び、早速その十七日にはポーランドに兵を進め、殆ど何等の犠牲なしに、その東半部を併合した。次いでバルト三國に迫つてこれ等を保護國化し、十一月にはフィンランド攻略に乗出し、本年三月のソ芬講和條約によつて、實質的に當初の目的を達成した。次いでルーマニアからベッサラヴィア、ヴィヴィナ兩地方を奪還したことは、世人の記憶になほ新たなるところである。曾つて「寸土も自國の領土を譲らず、また寸土も他國の領土を侵さず」と稱してゐたソ聯の標語は、かくて全く一片の反古と化し去り、同時に、ソ聯の不侵略條約なるものが、何等の價値なきことをも遺憾なく曝露したのである。蓋し、ルーマニアを除き、ポーランド、バルト三國（ラトヴィア、エストニア、リトアニア）フィンランド

等は、いづれもソ聯との間に不侵條約を締結してゐた國々であつたからだ。

尤も、ソ聯は、その時その場合に應じて口舌を弄することは頗る巧妙である。例へばポーランド侵略後には、モトロフ氏の口を通じて、ソ聯邦は世界の新たな状態に應じて、従来の侵略、不侵略の定義を改變せざるを得ない旨を聲明してゐる。またソ聯は、西ウクライナ人、西白露人をポーランド民族の壓迫と搾取とから解放したのであるなどといつてゐる。要するに、ポーランドの場合も、バルト三國の場合も、また、フィンランドの場合も、ソ聯的解釋によれば、弱小民族の「同意と希望」とによつて行はれたことで、侵略ではないわけである。更に興味ある事實は、以前は、英佛のデモクラシーに與みして、國際ファシズム打倒を叫んでゐたソ聯が、ドイツと提携するに及んで、俄かにその態度を一變し、今回の戦争は、ファシズム對デモクラシーの戦争ではなくて、英佛側がその帝國主義的勢力を維持せんがために、進んでドイツに仕掛けた侵略戦争である、と唱へ出したことである。前には、ファシズム即戦争なりと主張したのを、今度は、デモクラシー即戦争なりと言はぬばかりの豹變ふりを敢てしたのである。

これ等はすべてソ聯の現實御都合主義に起因するもので、要するに、ソ聯の對外政策は、自身は極力大國との戦争を避けつゝ、その背後から巧みに糸を操り、列強相互をして長く戦はしめ、その間隙と消耗とに乗じて、漁夫の利を占めんとするにある。すなはち、他國同志を闘はしめ、かれ等が共に傷くのを待つ

て、自己勢力の伸長を計らんとするのがソ聯式外交であつて、誠に徹底した利己主義であり、従つてその政策は、飽まで打算的、功利的、現實的たることを免れない。こゝに、ソ聯外交の本質的特徴がある。

ソ聯は常に平和主義を唱へてゐるが、これは、自分は今戦争を好まぬといふ意味で、他國同士の戦争はそれが自國に有害でない限り、むしろ大いに歓迎する所である。またソ聯は中立、不介入の立場を持してはゐるが、これもたゞ自國の建設と強化を急ぐための手段に過ぎず、他日絶対不敗の自信を得るならば、その時は恐らく態度を一變するに違ひない。まことに油斷のならぬ存在であるといはねばならない。

以上の如きソ聯外交に必然的に伴ふ更に一つの特徴は、相手の強弱によつて、著しく態度を變化するといふことである。今日ソ聯が、歐洲方面において、對獨融和の觀を呈してゐるのも、結局はドイツが強いからである。もしドイツ恐るゝに足らずとなれば、ソ聯の態度は忽ち一變して、斷然高壓的に傾くことは恐らく間違ひない。尤も、これは一般的に、國際間の常態ではあるが、とくにソ聯の場合は、多少でも弱味を見せたらお仕舞ひである。この間の消息は、從來の日ソ外交においても十分試験済みの筈である。

要するに、常にソ聯外交の動因は、目前の諸情勢において、如何にするのが得か損か、より安全か危険かといふことであり、また相手がどの程度に手ごわいか、どうかといふことである。われわれは、常にソ聯のこの現實的打算主義を忘れず、また謂ゆる道義外交の最も困難な相手たることも忘れてはならない。

### 十三、ソ聯の經濟並びに産業

五二

さらに、ソ聯との交渉において必要なことは、その經濟及び産業の實勢に對する豫備知識である。以下これについて略述を試みよう。

ソ聯經濟の最大の強味は、國土廣大、資源豊富で、世界を通じアメリカに次ぐ堂々たるアウトタルキョ國家であるといふことである。ソ聯の經濟は、今日では極めて僅少の部分しか外國に依存してゐない。この點ではソ聯は甚だ恵まれた國である。そのうへソ聯は、一九二八年に開始された第一次五ヶ年計畫以來、特に、アウトタルキョの確立を目指して、銳意努力を續けて來たが、その結果は明かにソ聯の貿易上に現はれ、一九二八年から一九三二年の第一次五ヶ年計畫時代における、一ヶ年平均の輸入總額は四十一億金留であつたが、一九三三年から三七年の第二次五ヶ年計畫時代のそれは、年平均僅かに十二億金留、すなはち、三分の一以下に低下したのである。他方、輸出は、一九三三年以降は年々出超を續けて今日に至つてゐる。但し一九三八年以後第三次五ヶ年計畫時代に入つてからは、國內産業の高度機械化乃至軍需工業の急激なる發展のために、生産財、とくに機械類の輸入が増加したので、必らずしも輸入は減少してないやう。

うであるが、少くとも第三次五ヶ年計畫完成の曉には、極めて僅少の輸入しか必要せぬことになるであらう。

試みに、ソ聯の軍需物資及び食料品等の主要なるものについて、その自給率を見るに（一九三七年度）、殆んど百%乃至それ以上に達したものと、石炭、鐵礦、銑鐵、鋼材、石油、棉花、アルミニウム、クロム、鹽、麻、燐礦石、石綿、マグネサイト、穀物、魚類、植物油、砂糖、綿布等々を擧げることが出来る。これに對して、かりに自給率八十%以下のものを拾ひ上げて見ると、僅かに銅、アンチモニー、ニッケル、鉛、羊毛、ゴム、茶等が残されてゐるだけである。

ソ聯は、第三次五ヶ年計畫以來、とくに重工業の發展に異常の努力を捧げつゝあるが、ソ聯の一流工業國としての面目は、第二次五ヶ年計畫の終り、すなはち一九三七年においてすでに充分備はり、工業品の總生産量は世界第二位で、機械製造高も同じく世界第二位を占め、トラクターも同様である。コンバインは世界第一位、自動車は世界第五位で歐洲では第三位。但し貨物自動車の點では世界第二位、歐洲で第一位。電力も世界第二位、歐洲で第一位。石炭は世界で第四位、石油は世界で第二位。鐵は世界で第三位、鋼鐵もまた同じといふ盛況ぶりを示してゐる。

ソ聯經濟の特色は、その計畫性と相俟つて、一切が國有、國營であること、従つて當局の意向一つで、

五三

國家が必要と認める方向に、いつでも即時生産方針を轉換し得ることである。そして今やソ聯當局は、高度國防國家建設を急ぐべく、あらゆる民需生産を犠牲にして、鋭意重工業の發展、軍需品の製造へと邁進してゐるのである。すなはち高度國防國家建設への一路邁進である。

かくて現行第三次五ヶ年計畫においては、重工製品の大増産計畫（この説明は省く）遂行を目論み、ために大規模の新建設の必要から、極めて莫大な投資を豫定し、第二次五ヶ年計畫の五八六億留に對して、約二倍の一・一九億留といふ天文的數字を示してゐる。このうち九四〇億留、約九〇%近くが重工業投資で消費財工業には残りの約一〇%、一八〇億留が宛てられてゐるのみである。かくして戦時における生産能力の、十分の餘力をつくらんとしてゐることは、とくに注目し値ひする。

次に、右計畫の他の特徴は、新建設の地理的配置に關する新方針の採用である。その重點は、原料地と消費地とを連結するといふことである。以前における兩次の計畫では、新建設が原料産地と消費地の距離を十分考慮しなかつたがために、輸送費の負擔を重加し、生産物の原價を高める結果を招來した。新方針はこれが是正を意圖してゐるのである。さらに、今次の新建設においては、國防上の見地から、成るべく空襲の危険なき場所を選ぶこと、また極東の不安に備へると共に、援蔣政策強化のためにも、東部シベリア方面に新建設の重點を置いてゐることも、大いに注目し値ひする。

これは謂はゞ、ソ聯重工業の東部移動を意味するもので、第一次及び第二次五ヶ年計畫期には、主としてウラル西部からウラル東部一帯にかけて、工業建設を行つたのであるが、第三次計畫においては、漸次これを東方に進め、とくに極東方面の新建設に多大の注意を拂ふやうになつたのである。極東における工業建設が、第二次五ヶ年計畫期から着手されたことは事實で、同期における極東建設への投資額は約八十億留、その約半ばが工業方面に向けられたのである。が、第三次五ヶ年計畫では約その三倍化が豫定され、そして、極東の採炭量を二・七倍して千數百處に達せしめること、新油田の調査、試掘作業の促進を計ること、銑鋼一貫作業のための新冶金地の創設「アムール・スターリン・ストロイ」の製鋼所の建設を完了することなどが意圖されてゐる。現在、ソ聯の極東工業化における最大缺陷は、その基礎たるべき製鐵業の缺如であり、ソ聯當局はとくにこの點に留意し、右の外に、小興安嶺地方の鐵礦とブレイヤ炭田のコークス炭とを結合して、この方面に銑鋼一貫作業の製鐵工業を創設する計畫も進めてゐる。

その他、極東工業建設に必要な發電能力の三倍乃至四倍化を計ること、極東自給を目指すセメント工業の發展、小型自動車及び自動車組立工場の建設、アムール河口のニコライエフスタ、カムチャツカのベトロハヴロスタにおける造船所の建設なども計畫されてゐる。勿論、極東の工業化は、今のところ、その緒に就いた程度で、自足の域に達するのは容易なことではないが、しかし、同地方の工業資源が、數、量共

に豊富なことと、ソ聯一流の強引な計畫實行とによつて、今後の發展は十分期待されるのである。

五六

だが、ソ聯の極東建設には、幾つかの難關も數へられる。その顯著なるものの第一は、人口が餘りに稀薄なことである。現在は、面積三百六萬八千平方キロの廣大な地域に、僅かに百八十六萬の人口が住む程度で、従つて純寒帯氣候の關係もあり、現在の農業生産では、かれ等の食糧自給さへも不可能の状態にある。ために、ソ聯當局は、種々手を盡して、歐露からの農民や女子の移住計畫を計り、かれ等に多大の便宜や特典を與へ、かつ耕地の擴張などにも大いに努めてはゐるが、しかしこれ等の困難の除去は、到底、短日月に解決さるべき性質のものではない。

第二の困難は輸送の不便といふことである。元來、ソ聯の重大な弱點の一つは、海上、陸上共に輸送路の不備不便なことであるが、とくに極東シベリアの場合はそれが甚だしく、不足物資を歐露からたゞ一本のシベリア鐵道で運ぶか、或はオデッサから黒海、地中海、紅海、印度洋、太平洋、支那海、日本海等を通じて、ウラジオまで船で運ぶかの外はなく、これはあらゆる意味で極東地方發展の一大ブレイキとなるものである。ソ聯當局は、この點でも、非常な考慮と努力を拂つてはゐるが、これまたソ聯の地理的條件からも、容易に解決し得る問題ではない。

但し以上の困難は、極東地方と、日滿經濟との合理的調整によつて、ある程度緩和されうることは、後

段に述べる通りである。

#### 十四、ソ聯國防の實勢

次にソ聯の國防態勢について一瞥を加へておく必要がある。

ソ聯の本年度軍事豫算は、總額約七百三十億留、陸海軍だけでも五百七十億留といふ巨額に上つてゐるが、この點米國にも劣らぬほどで、それほどソ聯は軍備の充實に孜々としてゐるのである。

元來、ソ聯の政治は、あらゆる點で國防本位であり、國民生活の安定などは第二義、第三義で、要するに、たゞ國家を富まし、國力を強くすることが中心目標である。これはスターリン政權の強化といふことゝ、不可分に考へられることであつて、強烈な民衆搾取によつて國家を富まし、その財力によつて國防の完備を計ることがソ聯政治の一大特色である。

第三次五ヶ年計畫においては、現下の國際情勢に鑑み、とくに國防の充實、軍備の擴張、それがための重工業の高度促進といふことが唯一の目標になつてゐる。ソ聯の民衆は個人的に貧しくとも、ソ聯自體は貧乏國家でも弱勢國家でもない。われわれはこの點を決して忘れてはならない。

五七

一九三三年のソ聯の軍事豫算は僅かに十五億留であつた。しかるに、七年後の四〇年度には前に示したやうな巨額に上り、軍隊の數も三三年には、僅か三十萬の軍隊と民兵しかなかつたものが、三八年には、すでに百八十萬の常備軍を備へるに至つた。同時に軍の裝備、機械化の點においても、この間著しい進歩を示してゐるのである。

第二次歐戰前夜の昨年九月一日附を以て、ソ聯では國民皆兵法が施行され、從來、勞働階級のみを課されてゐた兵役の義務が、滿十九歳以上五十歳までの全國民に擴大され、現役年限も各兵科を通じて延長され、戰時醫療關係では、婦人の一部も補助勤務のため動員されることになつた。ソ聯の軍管區は大體、十五、または十六區で、軍の平時總兵力は約二百二十五萬である。(特別任務部隊三十萬を含む)その編成は、歩兵軍團約二十五(軍團は二乃至四師團)狙撃(歩兵)師團百十、騎兵師團三十五、その他獨立部隊若干といふことになつてをり、他に機甲軍團、機甲旅團、戰車聯隊、獨立戰車大隊、裝甲列車大隊等があり、また砲兵を中心とする常設の獨立機械化部隊約五十八が設置され、化學戰裝備及び火力裝備の徹底は、列國陸軍に比して斷然光彩を離つてゐるのである。

例へば赤軍の火力裝備を見ると、一個師團當り、輕機關銃約三百門、重機關銃約二百門、手射歩兵砲、曲射歩兵砲が各五十門、野砲が約三十門、野戰重砲が約二十七門となつてゐる。また機械化裝備について

は、戰車總數が約八百臺、裝甲自動車數は不明だが相當多數で、且つその種類も多く、重量六、七噸の六輪裝甲自動車、水陸兩用裝甲自動車などもある。その外、タンクも數多くの種類のものが多數用意されてをり、さらに重タンク、超重タンクの性能の優秀さが認められてゐる。この外に化學戰部隊も、各小單位部隊に至るまで配備されてをり、そして大規模の化學戰特別研究委員會などいふものも設けられてゐる。

一九三五年九月から、ソ聯にも軍の階級制が設けられ、各國とほゞ同様の指揮官制度が實施され、軍律の強化が行はれると同時に、軍の服裝なども明確に決定された。そして新兵の宣誓書といふものが出來て、新入兵はすべてそれに署名せねばならぬことになつた。

次に、ソ聯の海軍及び空軍について一端を述べると、まづ赤色海軍は、一九三五年頃から大擴張計畫を立てられ、爾來、その質と量との擴大強化が行はれた。ソ聯の海軍區は、バルチック海々軍區、白海々軍區、黒海々軍區、裏海々軍區、太平洋海軍區の五區となつてをり、外に太平洋海軍區に屬するアムール艦隊、黒海艦隊に屬するドニエプル艦隊があるが、いづれも河川艦隊である。

ソ聯は造艦計畫やその現状を公表せぬので、正確な數字は不明であるが、その現有勢力は、大體において、戰艦五隻、巡洋艦九隻、航空母艦二隻、驅逐艦百十五隻、潜水艦百十六隻、海防艦五隻、水雷艦七十隻前後、潜水母艦五隻、敷設艦十隻餘、砲艦二隻、驅潜艇三十隻その他で、海軍飛行機數は約五百臺とい

ふところである。が、實際は、この數字よりもやゝ多いと見て差支ない。

六〇

次にソ聯空軍は、その總機數において、一九三四年には三千臺、三五年には四千臺、三六年には五千臺、三七年には七千臺、三八年には八千臺といふことになつてをり、現在は更に遙かに増加してゐることが想像される。なほソ聯の航空機製作能力は、一昨年一九三九年初頭において、一ヶ月五百臺内外である。

ソ聯は、空軍の發達に格段の努力を拂つてゐるが、その編制は陸海軍からは獨立のものとなつてをり、國防人民委員部内に空軍本部が設けられてゐる。ソ聯空軍は機材整備の點において、殆んど國外に需要を仰ぐ必要がなく、世界無比の最大空軍建設へと驀進してをり、關係工場數七十餘に上り、軍用機の性能もまた大いに優秀を誇るに足るもので、例へば、イ十六型戦闘機は、全金屬製低翼單葉で、M三二型七五馬力發動機を裝備し、最大速度四八〇杼時。イ十七型戦闘機は、最大速度四九〇杼時、五千米の高空への上昇時間僅かに五分間と言はれてゐる。また爆撃機も漸次改善され、現在では、デ・ベ・三型やエヌブ改造型のそれは列國優秀機に劣らぬものと言はれてゐる。この外ソ聯御自慢のバラシユート降下部隊といふ一分野があり、その人員養成數は一九三五年が二萬二千人、三六年が六萬人、三七年が十萬人で、その訓練設備も大規模に行はれてゐる。

以上が大體ソ聯軍の概況であるが、參考までに極東兵備の現況を見ると、陸軍は狙撃兵約二十五個師團、

騎兵約十五個師團、戰車約一千七百臺、その他多數の装甲自動車を有してをり、海軍は假裝巡洋艦七隻、驅逐艦七隻、砲艦七隻、潜水艦七、八十隻（全部新式）潜水母艦及び各種艦艇九十餘隻で、各艦艇はすべて堅固に改装され、またそれら多數の魚型水雷及び機械水雷を用意してゐる。そして必要以上に各處に軍港を設け、その他給水、給炭、給油の諸施設が行はれてをり、また新たにボシエツト、スラヴヤンカ、アメリカ灣、オリガ灣、ソグエート灣、亞港等に海軍根據地を建設した。これ等は北氷洋航路見通の曉には、歐露との緊密なる連絡により、大いに威力を發揮するものと見られてゐる。なほ同地空軍は、海陸合せて約一千臺と推定されてゐる。

ノモンハン協定成り、國境劃定委員會の成立などもあつたに拘らず、ソ聯の極東軍備がむしろ強化の一路を辿りつゝあることは、誠に奇怪至極であり、これで日ソ親善を圖らんとするは談易からずといはざるを得まい。

## 十五、ソ聯の強味と弱味

總括的にソ聯の強所を擧ぐれば（現在の國際的地位の有利は別として）大體左の如くである。

六一

一、国土廣大、資源極めて豊富で、自給容易であり、かつ外敵の徹底侵入が困難であること。後者は支那とやゝ趣きを同じくし、むしろそれ以上有利である。なほ金産類の多いことも、財政的に強味である。

二、人口の點で強國中第一位（大英帝國は別問題）を占め、現在、總數一億六千萬餘に達してをり、従つて戦闘員數も多數を準備し得るわけで、現に數量的には世界第一の陸軍を有してゐる。とに角、人口の多いことは、それだけ國力強大の一大要件となるのである。

三、一國一黨的ソ聯政治の特徴も、國家的立場からは一つの強味であり、すべての國家的行動が容易にかつ敏速に行はれうる。

四、經濟、産業その他がすべて國有乃至國營で、徹底せる計畫的統制を有することもソ聯の強味で、容易に高度國防國家たり得る特徴を具へてゐる。この點四年越しの戦ひを續け來つて、漸く本格的戰的體制に入らんとするわが國などに比し、確かに好都合である。

以上はソ聯の主たる強所であるが、反面また幾多の弱味も有つてゐる。その二三を數へると、

第一は、ソ聯の政治が徹底國家本位であり、ために民衆の利福を餘りにも輕視し、國民の心からの協力を得難いことである。事實上、資本主義國家以上に大衆の幸福が抑へられ、従つて、不滿の氣が國內に充ちてをり、一朝事あれば何時大混亂を來たすか測られない不安がある。いざとなればゲ・ベ・ウの勢力も及

ばぬ場合などが豫想され、とうてい樂觀を許さない。

二、共產主義を國是とし、自己中心の世界革命を本分としてゐるために、心から他國と提携乃至協力することが殆んど不可能で、常に世界を敵としてゐなければならぬ。すなはち、外部的にも常に不安がつき纏つてをり、列國との紛争が斷へない立場にある。この點でも一刻も安心出來ないわけである。

三、また餘りに個人的慾望を無視するために、國民の自發的創意を滅殺し、知能の低下、能率の減退を招くことを免れない。従つて國民全體が十分に發揮されない。また機械的な極度の計畫經濟における弾力性の缺如といふことも問題である。

四、国土の廣大は一面強味ではあるが、それだけ防備の負擔重く、かつ地理的に北方に偏在し、海に恵まれません、海上制覇の機會が乏しい。現に海外への通商路としては、バルチック海の出口はドイツに遮斷されてる形であり、北海もノルウェー沿岸からかけて英、獨の戰場と化してをり、黒海からの出口も英、伊の戰場となつてをり、今のところ安全なのは、米國から北太平洋、日本海を経てウラジオに至る海上ルートのみである。それも日本との關係が無事である場合に限られ、かつこのルートはウラジオ經由、シベリア鐵道一線によるといふ點で多大の不便さがある。これは國家の建設上重大な障礙をなすものといはねばならぬ。

なほ、ソ聯の鐵道網完備は、地域の廣さ、氣候、人口の配置等から見て、實に容易ならぬ大事業であり、かつ鐵道による輸送は、海上のそれに比して著しく輸送費を高め、それだけ物資の原價を高めることになる。

そして、かゝる海上交通の不便は、ソ聯が歐亞の新秩序勢力を、どうしても無視し得ない一つの理由ともなるのである。

### 十六、日ソ接近の必要と可能性

以上によつて、大體、ソ聯邦の一般的性格、特徴及び現勢等の輪廓を概観したわけであるが、さて、われわれにとつての當面の緊急課題は、日ソ接近の必要、その可能性、及びその方法如何といふ問題である。

まづ日ソ接近の必要といふ點については、主として經濟的の點に問題の重心がある。勿論、一般政治、國防等の部面にも多々問題はあるが、それ等も結局は、經濟の一點に歸着すると見て大過ないのである。

まづ、日本側からいふと、とくに三國同盟の成立以來、英米協力による對日攻勢が日に加はり、それは對日經濟壓迫の加重、太平洋における英米の作戰準備、兩國の援蔣政策の強化、ソ聯との共同戰線構築運

動等の形態において展開されてゐる。が、差當り、英米が最も重點をおいて、ますます強化せんとしてゐるのは、對日經濟壓迫である。すなはち日本經濟が、從來、高度の對英米依存であり、現に、日本の戰時經濟が英米、中んづく後者に依存するところ甚大であるといふ事實は、英米をして専ら經濟の一點から、日本の死命を制せんとするの態度を取らしめてゐるのである。

そこで、日本としては、速かにこの經濟的英米依存を脱却すべき必要に迫られてゐる。しかしながら、現在の日本經濟は、米、砂糖、生絲、硫黃や、若干の非鐵金屬を除いては、あらゆる重要物資——特に戰略物資において、自給を許さない立場にある。否な、米や砂糖でさへ、すでに若干の不足を告げてゐるのである。しかも、日本は、これ等の不足物資の供給を何處から仰いでゐるかといへば、例へば、一九三七年においては、その八六%を英、米、蘭（すべて屬領を含む）の三國から、そして、残り一六%をアルゼンチン、ドイツ、瑞典、フィンランドその他からといふ實狀である。特に戰略物資輸入について見るも、一九三八年度において、日本は米國から五六%、英帝國から二〇・七%、蘭印から八・六%、ドイツから七・七%を仰ぎ、斷然、米國が決定的役割を演じてゐることが知られる。

また、日本の輸入資金獲得上、絶對不可缺の輸出貿易においても、一九三七年に米國は二〇・六%を、英國は約一五%を占め、日本の平時總輸出の四〇%から四五%がこの兩國に向けられてゐるのである。

そこで、日本は、今後の對英米貿易悪化による打撃を、極力軽減する手段として、南洋その他との貿易振興以外に、對ソ貿易の擴大伸長を策する必要がある。從來、日ソ貿易關係は、甚だ不自然なる不振状態におかれてゐるが、これはソ聯側からいつても、是正さるべき必要がある。

なほ、日本は獨、伊樞軸圏との經濟的緊密化を計る必要上、現在の状態においては、ソ領を通ずる貿易ルートの確保を絶対必要とする。この點からも、ソ聯との提携が要請されるのである。

他方、ソ聯邦は歐洲戰亂の擴大によつて、遂次自給不能物資の入手難を加へつゝある。既述の如く、ソ聯は、目下高度國防國家建設に全力を擧げてをり、それがために、主として生産力擴充資材を輸入し、その決濟の必要から、農産物、燃料、重工業原料（鐵礦、滿俺等）を輸出してゐる。いま、その對外貿易關係を三八年度の實績について見るに、輸入貿易において、英佛及びその植民地の占める割合は二九・三%、中歐、バルト三國及びスカンデナヴィア諸國は、輸入において、合計二三・九%、輸出において、三二・五%を占めてゐる。しかるに、歐洲戰亂の擴大につれ、ソ聯は英佛を失つたがために、この方面との貿易が不可成となり、戰略物資の獲得難に陥り、歐洲で入手し得るものはドイツの機械類と他の數國よりの若干の原料及び鐵製品のみとなり、他はすべて米大陸、南洋、アジア方面からの供給に待たざるを得なくなつたのである。かゝる状態と共に、また、通商路線の困難化が、ソ聯貿易の方向を東部に移動せしめ、その一證左とし

て太平洋を通ずる米ソ貿易を活潑化するに至つた。從來、ソ聯の貿易ルートは、バルチック海、黒海、ムルマンスク、西歐國境を通じて約七六%を占め、残りの二四%が近東及び極東が占めてゐたのであるが、今日では、西歐國境の僅か四%以外は、いづれも危険區域と化し、専ら極東貿易ルートのみが無難なる状態にある。この點で、ソ聯は對日接近を有利、否なむしろ必須とする理由がある。

さらに、ソ聯の貿易は九割以上海洋ルートに依存するに拘らず、その輸送力の四分の三までは、西歐諸國の船舶に依存してゐた。しかるに歐洲の動亂によつて、その船舶のチャーターが不能となり、この點でも、ソ聯の對外貿易は困難を加重し、従つてソ聯貿易の再編制がこゝでも要求されてゐる。

最後に最も注目すべきことはソ聯の極東經濟建設には、日滿の物資を利用することが、最も有利であるといふ事實である。

ソ領極東は歐露の農業中心地から餘りにも隔絶し、しかも日滿とは直接國境を接してゐる。そして、極東は經濟建設を急がれてゐるにも拘らず、自給可能なものは僅かに魚類、肉類及び乾草のみで、石炭、石油、建築材料、金屬、木材、その他食糧品の大部分はこれを自給し得ず、歐露または外國からの輸移入によつて賄れてゐる。が、歐露からの移入が歐洲動亂のために困難を加へ、外國からの輸入も遠く米國や南洋方面から仰がねばならぬとすれば、これを出來るだけ、日滿からの補充に求めることが最も便利な筈である。

以上の觀察により、要するに、日本も、ソ聯も、歐洲動亂の擴大化につれて、相互に提携を有利とすべき幾多の經濟的理由があると断じうるのである。

そこで、問題となるのは、現實に、日ソ兩國經濟において、有無相通じうる可能性があるかといふことである。

この問題の説明には、日ソ兩國經濟並びにその貿易の内容を詳細に検討する必要があるが、こゝではその暇がないので、結論的に要約することとする。

大體からいつて、ソ聯は今、全輸入の九〇%までは、生産材（その原料、半製品及び完成品）の輸入を行ひ、消費材（生活必需品）の輸入は僅かに全輸入の一〇%にしか過ぎない。すなはち、その輸入品の大部分は工作機械、羊毛、非鐵金屬、ゴム等、日本の自給し得ないものが主で、生活必需品の輸入は極度に統制されてゐる。しかるに、日本は工業の原料輸出國ではなく、その輸出の六割までが纖維工業製品であり、しかも、支那事變處理と滿洲産業開發とのために、多くの製品を滿支兩國に供給せねばならぬので、日本の對ソ輸出は頗る困難であり、殊に日本の生絲、綿製品、滿洲の大豆等において、ソ聯が完全自給の域に達し、むしろ、盛んに輸出を行つてゐるといふ事實は、日ソ貿易上の悲觀材料である。

しかし、ソ聯及び極東の輸入必需品中、日本よりの輸出可能なものとして鋼材、鐵鋼板、ブリキ、針金、

鐵管、硫黃、セメント、電氣機械、コンレッサー、旋盤、ポンプ、船舶、時計、茶、皮革製品、漁具、魚類、小麥粉があり、中んづく、茶の如きはソ聯の特殊事情により、日本の供給に最大の期待を持たねばならぬものである。またソ聯の特殊的考慮においては、日本は一般生活必需品の極東への進出が可能である。尤も、以上諸物資の對ソ輸出についても、日本の物資自給の觀點からすれば、相當の無理を餘儀なくされることは勿論であらう。但し、鐵製品の對ソ輸出については、ソ聯の鐵鑛石、銑鐵等の供給を條件とすれば、大いに有望化すると思はれる。

次にソ聯の必需品中、日本からの輸出不能なものは、機械類の大部分、合金鐵、良質鋼、非鐵金屬類、ゴム、羊毛、米、コルク、ココア、皮革原料、ヂユート、ケナフ、キニーネ、鹽、砂糖、材木等である。

さて、ソ聯側として、日本の必需品中供給可能なものは、石炭、無煙炭、石油及び同製品、鐵鑛石、銑鐵屑鐵、棉花、滿庵鑛、燐礦石、木材、皮革、マグネサイト、自動車、白金、石綿、鹽、岩鹽、染料、曹達、煙草、小麥、牛脂、砂糖、毛絲等がある。しかしこれ等はソ聯の國內需要の増大と、他方對獨輸出の必要とにより、特に石炭、石油、鑛石類の對日供給は困難であり、その成功には、日獨ソ三國間の特殊協定を必要とするであらう。

また、ソ聯の對日輸出不能品としては、アルミニウム、ゴム、ニッケル、水銀、銅鐵礬土、アルミ礬

土、アンチモニー、モリブデン、錫、バルブ、麻袋などが数へられる。

七〇

更に、日ソが共に供給不可能な物資として、ゴム、羊毛、銅、ニッケル、アルミニウム、鉛、錯、亜鉛、アンチモニー、モリブデン、水銀その他熱帯の特産品があり、このうち、亜鉛とアルミニウム以外のものは、ソ聯が是非とも外國からの供與に俟たねばならぬものであり、中でも非鑛金屬、ゴム、羊毛、熱帯特産品等の主要供給國は南洋、米國、アジアの諸地方に散在してゐる。従つて、とくにこれ等物資の獲得については、ソ聯としては、日本を仲介とする貿易を考慮する必要が起つて来る。

以上の觀察からの結論として、要するに、日ソの完全な經濟提携は望み得ないが、しかし、日本がソ聯の原料を利用して、ソ聯に完製品を送るといふ關係に立てば、日ソ經濟提携の餘地は十分考へられる。また、ソ聯が一般生活必需品の輸入について、新たに考慮すれば一層有利であり、殊に極東ソ領についてはその感が深いのである。

なほ、三國同盟間の經濟提携の見地からも、また、日ソ及び米ソ貿易の便宜上からも、大陸鐵道の最も有效なる利用法が講せられる必要があり、この點についても、日ソ間の協力による何等か適切な取極めが行はなければならないと思ふ。

最後に、過去における日ソ貿易關係を一瞥すると、一九二五年の日ソ國交回復以後、連年、兩國の貿易

は上昇を示し、一九三〇年には、輸出入合計六千八百萬圓を突破するに至つたが、その後やゝ減退を示し、支那事變勃發の年までは、毎年四千萬圓から五千萬圓前後といふところであつた。が、日支事變の發生以來この關係は殆んど中絶状態となり、一昨年は貿易總額五百九十三萬圓、昨年は僅かに六十萬圓で、皆無に等しい状態に陥つたのである。

いづれにしても、日ソの貿易關係は餘りに貧弱であり、隣接國として甚だ不自然を極めてゐるが、要するに、從來における日ソ國交の不振に、その主因を求めざるを得ない。

しかし、今や世界情勢の激變と共に、かゝる經濟關係の一大轉換を迫られてをり、またこゝに日ソ國交調整の一大要因があるといはねばならない。

## 十七、日ソ國交調整の難關

日ソ國交の調整に當り、是非とも解決せねばならぬ重要問題は、前にも一應列擧したやうに、北方利權問題、滿蒙、滿ソ國境問題、ソ聯側の莫大な國境駐兵問題、歐亞連絡問題、援蔣中止問題、東亞新秩序承認問題等があり、さらに進んでは、新國民政府承認、不可侵條約締結、新通商條約の決定、ソ聯の三國同

盟への加盟、等々をも数へ得るかもしれない。

これ等のうち、とくに重要な二三の點について、以下若干の説明を加へよう。

日ソ國交上のパロメーターとして、絶えず兩國紛争の的となつてゐる最も古い問題は、わが北方利権中、とくに北洋漁業の問題である。周知の如く、日ソ間の空氣の緩急は、いつも乍ら、直ちに、この問題に反映して、その時々紛争の比重を或は高め、或は低めるといふ仕末で、まさに日ソ國交上のパロメーターの名に値ひする。

今さら、いふまでもなく、日本の北洋ソ領沿岸における漁業権は、例のポーツマス講話條約によつて確認された不動の國權であり、わが對露戦捷の一つの記念品である。しかし、わが北洋漁業そのものは、決してこの條約の結果新たに生れ來つたものではない。事實は遙かにその以前から存在し、たゞ右條約によつてそれが法文的に確認されたにすぎない。従つて、この漁業権は、謂はゞ日本人が天から授つた自然の權利ともいふべく、事實、日本人の經營に委せておくことが、世界經濟の上からも、最も合理的であるといへるのである。

そして、一九二五年一月に成立した日ソ基本條約において、右ポーツマス條約が再確認され、改めて日ソ間に、新漁業條約が締結され、爾來、日本人の刻苦經營によつて、ソ聯のあらゆる不法壓迫にも拘らず、

今日の隆盛を見たものである。そして最近は何年に一億以上の生産を收め、國民食料問題の上からも、外貨獲得の見地からも、實に重大な役割を演じてゐるのである。

またこれと共に、北樺太における石炭、石油利権があるが、これも尼港事件の代償たる意味で、日ソ基本條約において成立した利権契約であり、ソ聯の北樺太領域の開発は、この利権企業を中心として發展したといへるのである。が、ソ聯は一九二八年、第一次五年計畫開始と共に、つぎ／＼に外國利権を清算し、やがてわが漁業及び石炭、石油利権のみを残すこととなつたのである。従つて、ソ聯の現状においては、これ等利権の存在は甚だ好ましくあらざる存在であり、ために、石炭、石油利権の如きは、言語に絶した壓迫を受け、石炭利権は今や殆んど移行不能に陥り、石油にしても採算不能の状態におかれてゐるのである。しかし、石炭、石油兩利権も日ソ間の相互依存關係を考慮し、基本條約によつて國家間に取極められた特殊權益であり、諸外國における普通の取引きや、個人契約によるものとは異なり、一方的に勝手な取扱ひを斷じて許さぬ性質のものである。

従つて、北洋漁業利権を初め、これ等の利権の新たな處理については、基本條約の改訂にまで溯らざるを得ず、それには、日ソ關係の現實的な根本的變改を前提とせねばならないのである。従つて、事は極めて重大で、決して簡單にはゆかない。いづれにしても、これ等權益の新處理は、日ソ相互依存關係の再

確認の上に立ち、相互共榮の最も合理的な解決が與へられるのでなければ不可能である。

因に、かゝる重大なる國家的權益の運営が、二三の民間營利會社の手に委ねられてをり、ために、ソ聯の如何なる壓迫や彈壓に對しても、直接、全國民一致の反撥を容易に期し難いといふ現状は、常に弱所を狙ふソ聯に對し、甚だ不利であり且つ不合理でもある。この點は、われ等が多年主張し來つたところであるが、常にこれ等權益の背後に、國民の總力を配備する如き、強力なる國家的組織に還元することが、當面の急務である。

次は、國境問題であるが、日滿とソ蒙間には、海に陸に、蜿蜒數千哩に亘る國境が横たはつてゐる。しかも、事實その分界が甚だ不明瞭なるため、從來、カンチャズ事件、張鼓峯事件、ノモンハン事件等を始め、大小無數の國境紛争を重ね來つたのである。また、これとの關聯において、ソ聯の大規模の國境駐兵問題がある。これ等の點は、紛争處理並びに國境確定委員會の設置、その他適當の方法によつて、速かに妥當な對策が講じられなければならない。

次に重要なのは、ソ聯の援蔣中止問題である。これは日本の、東亞新秩序建設及び支那新政府の承認問題とも、關聯して考慮さるべき事項である。ソ聯の物質的援蔣そのものは、日本としては、さほど重視を値ひせぬが、しかし、援蔣政策の繼續は、直ちにソ聯の日本に對する敵性、否な、結局は同盟三國に對す

る敵性さへも示すものである。蓋しソ聯の援蔣行爲は、日本の東亞新秩序建設の意圖を否認するものであり、日本と獨伊の東亞における新秩序建設を互ひに尊重し、且つそれがための提携協力を契へる三國同盟條約の本旨と相容れないからである。故に、日ソ國交の調整については、是非ともこれ等の點に對するソ聯の態度の是正を要求せざるを得ないのである。

以上の如き重要諸件が全面的に解決された上で、日ソ間の不侵條約が結ばれるならば、それは必らずしも無意味ではない。現實の諸問題の友好的、具體的解決なくして、單に紙上の不可侵を契つたところで、それは一片の反古たるに止まるであらう。

日ソ國交の調整については、日本側としても、勿論十分の誠意と大乗的な讓歩的精神とが必要であるが、しかし、事を急がんとする餘り、或は焦燥に陥り、或は媚態を呈する等のことがあつてはならない。とくに對ソ外交の場合、それは決して事を満足に解決する所以ではないのである。

從來の北洋漁業問題の交渉、國境確定問題の交渉、そして昨年來の日ソ通商問題の交渉等を通じて、ソ聯の態度について、われ等に痛感される一事がある。それは誠意の缺如といふ一語につきること、常に種々雑多な手を用ひて交渉の遅延策を講じ、一面交渉成立の可能を思はせつゝ、大事な瞬間へ來ると俄然、逃避的態度に出で、すべてを水泡に歸せしめることである。かくて、近づくかと思ひば離れ、離れたかと思

ひは再び近づくといった千變萬化の様態を弄し、容易に事を解決させない。これがソ聯外交の一特徴であつて、謂はゞ一種の神經戰術である。相手をして疲勞困憊せしめ、以てその隙に乗せんとする一つの手である。正直で氣の短い日本人は、とかくこの手に掛り易い傾向があるから、大いに警戒する必要がある。かゝる神經戰術による敗北者は、ともすれば支那におけるソ聯勢力圏の協定とか、或はソ聯の中部アジア進出の承認といふが如き、驚くべき迷論をさへ唱へることになるのである。しかし、かゝる問題については、ソ聯は、敢て日本の配慮を要せずといふかもしれない。のみならず、アジア民族の解放を一大使命とする日本の立場として、夢にもかゝる帝國主義的分割政策を念頭に上すべきではない。これ等の問題は、元來、當該國民の自主的決定に俟つべき事柄であり、他國間で勝手に取極めうる問題ではないのである。われわれは、切に日ソ國交の改善を要請する。しかしながら、それは日本側の一方的讓歩によつて、不自然に招來さるべきものでは斷じてない。それは飽まで相互信賴の結果として、公正に解決さるべき事柄である。日本の態度は、この點において常に公明正大であり、かつ毅然たるものでなければならぬ。

### 十八、ソ聯に對する日本の要求

可能、不可能は別問題として、日本としてのソ聯に對する最も根本的な要求は、正しい意味におけるアジア民族の解放と、歐亞を通ずる新秩序建設への協力及びこれに基く世界平和の實現への協力といふことである。

歐亞の兩大陸に互り、やがて實現さるべき協同圏は、大體、日本を中心とする大東亞共榮圏、獨伊を中心とする歐洲共榮圏、並びにソ聯圏の三者であることは明かである。そして地理的にも、また、これ等三大圏の革新的な歴史的傾向においても、この三者は密接なる相互依存關係に立つことが極めて自然であり、三者の協同によつてのみ、歐亞大ブロックの永遠の平和が實現されるのである。

將來、豫想されるアングロ・サクソン大ブロックは、地域的には、大體、米洲大陸と南太平洋とに展開されるであらうが、これは明かにソ聯の排撃する資本主義的乃至帝國主義的勢力圏であり、舊秩序維持の舊勢力であり、歴史的に過去の世界に屬するものである。従つて、革新的新興勢力圏とは、根本において、必然的に對立せざるを得ないものである。最近ヒトラー總統は、金の支配する經濟を排し、勞働力を基礎とする世界の實現を宣言したが、この點はソ聯として恐らく毫も異議なきところであらう。

ソ聯は新興勢力であると共に、その性格から見て、事實上、一種の全體主義的國家である。そして、獨伊はいふまでもなく全體主義國であり、日本も一君萬民、八紘一字の謂はゞ一大家族主義國家であつて、そ

れ／＼の特殊性は帯びながらも、根本においては類似の傾向を有してゐる。尤もソ聯の國是たる共產主義は、日本も、獨伊も、賛同し得ざるところであるが、しかし共產主義はソ聯自體を始めとして、實際には、今日世界の何處にも實現されてゐないものであり、それは、かりに實現し得るとしても、遠い未來の夢でなければならぬ。ソ聯の謂ゆる赤化なるものも、現實には何等共産化を意味せず、たゞ徒らに他國を混亂せしむることゝ、ソ聯邦の國家的勢力の進出とを意味してゐるにすぎない。尤も各國民には、それ／＼の國民的理想があり、またそれ等が、如何に高遠にして且つ夢想に近いものであらうとも、敢て妨ぐるものではない。たゞそれを實現するために、他國に不當の干渉を加へ、或は他國の存在を危ふからしめる如きは決して許されないのである。この故にソ聯は、よし飽まで共產主義を捨て得ないとしても、それを他國に強制する不當手段を一擲して、まづその價値を自國內で實驗し、萬人に異議なき立派な標本を示した上で、自然に他國民の共感を求むべきものである。佛教の理想も基督教の理想も高遠にして且つ博大なものである。しかし乍ら、もし、或る國民が、暴力乃至強制手段に訴へてこれが宣布を計るならば、それは確かに一種の害悪たるを免れない。共產主義の場合も同様であり、かりにそれが正しいものであつても、もし、強いてその實行を他に迫るとあれば、ソ聯は、常に世界を敵とするの危険を冒さなければならぬ。この點において、ソ聯の政策は速かにこの際修正さるべきであると思ふ。

また、ソ聯は常に、被壓迫民族の解放を標榜してゐる。この點において、ソ聯の意圖は、各國民を解放し「萬邦をして各その所を得しむる」ことを念願する日本並びに獨伊の誓願と一致する筈である。従つて、この點においても、ソ聯はわれ等の友邦でなければならぬ。しかし、これまた強制的手段を弄する帝國主義的のものであつてはならない。民族解放の美名に隠れて、不純な野望の達成を圖るものありとせば、われ等は飽までそれを排撃せざるを得ない。のみならず、かくては世界の革新勢力たることも、新秩序の建設たることも出來ず、徒らに舊帝國主義勢力に、乗する機會を與へる所以となるのである。

ソ聯は、かくて三國同盟側と歩調を一にし得べき幾多の理由があるが、實際において、ソ聯は地的にも三國側と相接し、相互依存せざるを得ざる關係にある。強いてこの關係を無視して協力を否むことは、ソ聯自體のためにも決して有利である筈はない。大觀すれば、それは近隣相争ふことを意味し、謂ゆる兄弟離に闕ぐ所以に外ならない。

ソ聯は特にアウタルキ一の完成を目指して邁進しつゝあるが、アウタルキ一は決して地方的に完成されるものではなく、またそれは強いて實現を期すべきものでもない。現下の世界狀況はわれ／＼にアウタルキ一の追求を餘儀なくしてゐるが、これはむしろ變態的現象であり、各國有無相通じ、共存共榮することが、人類本來の理想である。従つてソ聯も、他の新秩序圏も、飽まで相互扶助・共存共榮の方式を極力設

定すべきであり、然らざる場合は、相互に不便と不利とを免れない。

八〇

われ／＼は以上の意味において、ソ聯が三國同盟側と完全に手を結び、共に一心一體となつて、歐亞大陸の健全なる發展と、永遠の平和實現のために、協力することを切望して止まない。

ソ聯當局が、果してこの自然にして且つ賢明なる道を選ぶかどうかをわれ／＼は知らない。現状においては、これ或は一片の空望に過ぎぬものかもしれない。しかしながら、これこそソ聯に對するわれ／＼の根本的要求であり、かくてこそ、眞の提携が可能であると信するが故に、われ／＼は執拗にこの要求を堅持し、かつ飽までソ聯の反省を求めんとするものである。

### 十九、われ等の根本的覺悟

英米協同の對日重壓はいよ／＼重加して來た。米の援蔣一億萬ドル借款供與と相呼應して、英の援蔣一千萬ポンド借款供與も行はれることになつた。そして英米支三國同盟説さへも流布されるに至つた。また英米の對日禁輸も大いに擴大されんとする傾勢にある。日本の立場は日を遂ふて困難を加へんとしてゐる。従つて日本は、ます／＼三國同盟を強化し、且つその威力を十二分に活用すると共に、ソ聯との提携も極

力推進する必要がある。

しかしながら、日本は如何に困難が加はらうとも、斷じて消極主義や敗北主義に陥つてはならない。謂ゆる大乘的立場に立つて、ソ聯とは勿論、米國とも無用の摩擦は極力これを避くべきではあるが、しかし大乘的立場といふのは漫りに讓歩し、或は叩頭することではない。毅然として自己の立場を護りつゝ、公明なる態度において、求むべきは求め、讓るべきは讓り、聽くべきは聽き、説くべきは説くことである。

たゞこれを爲すには、われ／＼に根本的な一つの覺悟が必要である。

最近、松岡外相は、外國新聞記者との會見に際し、日本は支那において、正しいことを爲してゐると信するが故に、支那から手を引く意志はない、といふ趣旨を明かにした。しかし、日本はいま、支那においても、南方に對しても正しきことをなし、また正しきことをなさんとしてゐるのである。また、必らずさうでなければならぬ。

日本はいま大東亞共榮圏の確立を意圖してゐる。これは斷じて口頭禪ではなく、また口頭禪であつてはならない。そしてこの共榮圏の確立は、その國內に含まるゝ諸民族の、帝國主義的壓迫からの解放を前提とするものである。われ等は、この圏内における帝國主義的、植民地的支配の存在を許さない。同時にまたこの圏内諸民族間の軋軋抗爭をも許さない。それは文字通り「共榮圏」であり、協力圏であり、自主的

の相互扶助圏でなければならない。同時に、われ等は、身を以てこの事實を證明することによつて、宇内諸民族の正しき認識と自覺とを促がし、且つかれ等の眞實の共鳴を贏ち得なければならぬ。かくてわれ等は、かれ等に對する優越感、利用意識、自益主義を一擲すると共に、他方かれ等に對する指導國民としての重責を痛感し、且つその完遂を圖らなければならない。こゝにわれ等の謂ゆる歴史的使命があり、大東亞革新の意義があり、そして天地に恥ぢざるわれ等の堂々たる立場がある。

われ等にこの覺悟と決意とがある限り、われ等の行動は、やがて、歴史の正しき審判に堪へ得るものであり、現在の如何なる誤解も非難困難も時と共に霧の如く解消されるであらう。

われ等はこの覺悟と決心の上に立つ時、何物をも恐るゝ必要はなく、また如何なる困難にも堪へ得る筈である。われ等がこの根本的覺悟に立つて、事に當る時、斷じて卑屈に流れ、敗北主義に陥り、右顧左眄、躊躇逡巡する必要は斷じてないのである。

われ等は他國の功利的現實外交を恐れる必要はない。またそれがために、われ等の道義外交を棄つべき謂れはない。われ等は正しいのである。われ等は飽まで道義外交の立場において、その正しさを堅持せねばならない。またその故にこそ、われ等は勇敢でありうるし、また勇敢であらねばならない。

外交の勝敗と雖も、究極するところ、主體的條件の具はると否とによつて決せられる。自己の力を疑ひ、

自己の正しさを信せず、自強不息の用意なくしては、ひとり外交のみならず、何事においても、勝利の榮冠を望み得る筈はない。

この意味において、われ等はまづ國內における物心兩面の新體制を眞實整備すると共に、不敗の堅陣に據つて、堂々百難に當らねばならぬ。かくて、常に正道を把持して譲らざる不退轉の決意を用意するならば、敢て對ン外交といはず、如何なる國との接衝においても、斷じて不覺をとる憂ひはないであらう。

(昭和十六年一月十日完稿)

410  
258

昭和十六年二月十六日 印刷納本  
昭和十六年二月十八日 發行

【定價金參拾錢】

著作兼編輯人 內藤民治

發行人 五十嵐隆

印刷人 高橋時太郎

印刷所 高橋印刷所

東京市荒川區日暮里町一ノ一八七五番地

發行所

東京市麴町區內幸町一、東洋ビル三階

電話銀座四六二八二番  
番替東京二四二〇四番

國際日本協會

